

交流を原動力とする島づくり

—新島と「よそ者」の関係性の考察—

主査 浦野正樹教授

早稲田大学文化構想学部文化構想学科
社会構築論系 4年
1T090317-7 岸加奈子

目次

序章・・・研究の背景・目的及び調査方法	
1	問題意識と研究目的
2	仮説
3	論文構成と調査方法
第1章・・・地域活性化とよそ者	
1-1	よそ者論
1-2	よそ者の役割と効果
第2章・・・離島の地域特性	
2-1	離島とは
2-2	離島振興法からのあゆみ
第3章・・・新島の地域特性	
3-1	新島の概況
(1)	概況
(2)	人口
3-2	新島の歴史
(1)	沿革
(2)	流人の島
(3)	離島ブームとサーフカルチャー
3-3	新島の産業
第4章・・・新島の地域活性の取り組み	
4-1	新島 アウトドアウエディング事業
(1)	新島アウトドアウエディングを取り上げる理由
(2)	ウエディングの概要
(3)	ウエディングの意義
4-2	ウエディングに至る背景と関連アクター
(1)	ムラから都市への歩み寄り
(2)	都市からムラへの歩み寄り
(3)	ムラと都市の結びつき
4-3	よそ者の役割
4-4	よそ者が担える範囲
第5章・・・開かれた地域コミュニティへ	
5-1	島の内と外をつなぐしくみ
(1)	人を通じたコミュニケーション
(2)	場・空間を通じたコミュニケーション

	5-2 地域プラットフォームの変容
	5-3 活動を担うアクター達のモチベーション
	5-4 おわりに
終章	
	1 論文まとめ・フロー図
	2 論文の意義

序章

【1】問題意識と研究目的

現在島は多くの問題を抱えている。バブル経済崩壊以降の景気低迷の中で、観光不振、農漁業の停滞など、島の基幹産業としていたものが伸び悩み、島が飛躍的な成長を遂げていた“離島ブーム”は過去の出来事である。ブームを頂点として来島者は年々減少しているのが実情であり、若者の島外流出、高齢化、少子化などといった問題も合わせて、地域社会を維持する上で多くの問題を抱えている。また、離島振興法のもと、整備されてきたインフラであるが、補助率が高いこともあり公共事業への依存度が増し、行財政の負担も増している現状である。このように、中央政府や地方政府が中心となった外発的発展だけでは離島地域の問題は解決されず、生活の維持が難しくなってきた中で、地域住民による内発的発展を目指す動きが東京都新島村では起きている。特に新島では島外からやってきたいわゆる「よそ者」の存在が際立って見られた。離島には自然の豊かさを活かした農業や漁業がある。都市化の影響を受けずにそのまま受け継がれてきた、人を魅了する文化や観光資源がある。このような島の潜在的な魅力に引き寄せられたよそ者たちと島民との関係には、公共事業や観光事業に見られるような外部への依存を単純によそ者への期待に転換するのではなく、地域側とよそ者の協働する形があった。離島ブームを背景に単なる観光客と島側という関係にすぎなかったものが、どのようにして現在のような協働の形につくり上げられていったのか。本稿では、先行研究や報告から離島社会の概要を踏まえ、ここ数年の新島における地域づくり活動の動きを整理する。その中で内側(島)と外側(よそ者)の関係性について考察することを本論文の目的とする。そして、内と外を繋ぐ地域社会運営のための仕組みを明らかにすることを2つ目の目的として設定した。

【2】仮説

「よそ者が島の担い手となっているのではないか」という仮説のもと、新島における島の外側と内側との関係性に着目して新島の調査を進めていったところ、新島では公共事業などに見られる外部への依存を単純によそ者への期待に転換するのではなく、地域側とよそ者による協働の姿があったという結論に至った。そして、その仕組みに背景には外と内を繋ぐ中間的存在(ソフト面/ハード面)があったのではないかと考えた。この考えを導くに当たって、参考にした敷田麻美氏のよそ者に関する論文を視座として第一章で触れておく。

【3】論文構成と調査方法

本論文は序章と第一章から第五章、終章で構成される。第一章では、主に「よそ者と地域づくりにおけるその役割にかんする研究」(敷田 2009)などの先行研究を参考に、地域づくりとよそ者との関係性、必要性を述べ、本論文の視座とする。第二章では、

新島という地域を扱う際に、まず離島とは何かを明らかにし、離島地域の特性を把握する必要がある。ここでは、離島の地域特性について、距離・密度・閉鎖性・逃げられない状況などのキーワードを用いて離島地域の特性を整理する。次に離島振興法という制度的な面から離島の定義や概要を整理しつつ、「離島振興計画」と「全国総合開発計画」を照らし合わせた離島のあゆみを整理する。離島の地理的特性、社会的特性、経済的特性についておさえておく。第三章では、新島の概要について概況・歴史・産業の項目から整理する。概況では新島の人口について少子高齢化の現状をグラフから整理する。歴史では、新島を語る上で欠かせない、流人島としての歴史とサーフカルチャーについて述べ、外からきた者(=よそ者)である流人は何か新しいものをもたらしてくれる存在」として昔から捉えられてきたこと、また、サーフィンが有名な新島では、海や音楽といった若者を魅了する資源をもち、広く若者を受け入れてきた母体があったことなど、新島の地域構造に大きな影響を及ぼしたと考えられる離島ブームと併せて述べる。産業では、離島ブームによる観光産業に依存している構造と、公共事業に依存している構造をグラフから改めて抑える。

第四章以降が本論であり、新島で取り組まれているアウトドアウエディングの事例を中心として、よそ者と島側が協働に至る背景を追っていき、その中で関わり合うアクターの間関係性を見ていく。そして第五章で、本論文の仮説である、交流による地域づくりには外と内を繋ぐ中間的存在(ソフト面/ハード面)があったことについて述べる。さらにそこから、地域プラットフォーム論に議論を発展させ、新島のウエディング実施に至るまでの過程は、閉鎖的であった地域が次第に外部に開かれていった過程であると考え、農村型コミュニティと都市型コミュニティについて考察し、本論を終わる。最後に論文のまとめと意義を述べる。

研究にあたり、2012年5月に東京都新島にてアウトドアウエディング事業のフィールド調査、8月に同じくヒアリングを中心とするフィールド調査を実施した。フィールド調査以外に離島に関する先行研究の分析を行った。

第一章 地域活性化とよそ者

【1-1】よそ者論

近年、地域の課題として地域活性化が叫ばれ、「新しい公共」などの言葉が出てきたように、地域の主体は自治体だけでなくNPOのような非営利組織、社会企業家などにも求められ、様々なアクターが関わる地域づくりが進められてきている。その中で、地域のことは地域で解決しようという風潮があり、このような「地域の自給自足主義」の考え方は地域住民参加、地域主体という点で重要であると考え。しかし、問題とされる多くの地域が抱える悩みは、地域づくりを進めようにも、地域に十分な人材がないということである。過疎の進行に伴う、地域の担い手の減少により地域を維持することすらままならない状況を生んでいる。そこで、地域住民以外の人、い

わゆる「よそ者」に注目はできないだろうか。¹「若者・よそ者・ばか者」がいれば地域は動くという考えからも近年よく聞かれるようになった。

“よそ者—地元の気づかない視点でその地域のよさを発見する”

とあるように、固定化された地域に異質なよそ者が入り込むことで地域づくりに何らかの影響を与え、変化を促し、新しい視点も持ち込んでくれるなど、地域づくりにおいてその役割が注目されつつある。この考え方から地域が外からの支援を受け入れるという形で地域運営を補完する機能をよそ者に期待できると考えた。そもそもなぜよそ者が必要なのかという議論に関して、敷田(2005)は今日のように交流人口が増加し、物流・交通・インターネットが国内各地まで浸透すると地域外から孤立して自らの地域を維持することがほぼ不可能になっている。そして、仮に地域外との交流を絶とうとしても、観光客など地域外から積極的に地域に入ってくる人々を排除することはできない、と述べている。確かに、むしろ地域だけで完結することの方が現代においては難しい。これは、海で隔たれ本土と距離を置く離島においても同様である。メディアによって火がついた昭和40年代からの離島ブームによって、観光ラッシュに沸き、島は観光客で溢れ返った。これによりかつての自給自足の生活は一変し、観光施設や宿泊施設の整備がすすめられ、地域の産業構造が大きく変わった。まもなく離島ブームは終焉を迎えたが、観光という外部からの市場の流入により、離島においても観光客=よそ者を排除して考える地域づくりは難しいと考えられる。また、離島ブームでは多くの移住者も生み出したが、近年は田舎暮らしや島暮らしなどを求めるIターン、Uターン者も多く、移住者を積極的に受け入れようとする島の自治体も増えている。

「UI ターン者が島に来てくれた影響は、単に人口増加という“数”の問題だけにとどまりません。彼らの存在がもともとの島民やこの島全体にとって、新しい刺激になっているのです。」と隠岐諸島のひとつである中ノ島海士町の町長、山内道雄氏は自らの著書の中でこのように語っている。海士町は財政破綻寸前であったが、行政改革と産業創出策により復活を遂げた島として注目を集めている。UI ターン者の積極受け入れを行っており、この7年間で290人もの移住者がやってきた。彼も著書の中で「若者・よそ者・ばか者」の効果について指摘している。海士町で地域づくりに関わっている方とお話する機会があったが、「海士町はまわりはみんなIターンだらけ。しかも一流企業や大手で働いていた人なんかが多い。だからみんな何かしたいという思いや、問題意識を持っている人が多い。」と話してくれた。近年のUI ターン者は、リタイア後の生活を島で過ごそうといった癒しを求めるといよりも、自己実現のための労働が求められてきていると広井(2009)が述べるように、地域活性化に貢献することで仕事とは別に社会との関わりを求めようとする人々が多い。以上のように地域でのよそ者の必要性がますます注目される中で、人口が減少している離島にとって、

¹ 関満博氏が提唱。「若者—逆さというエネルギーが大きな活力となる。」「ばか者—馬鹿になって真剣に打ち込んでくれる。」

よそ者は人口増加だけでなく、地域活性化の点からも注目できると考えた。

ここで本稿でのよそ者の定義を提示しておく必要がある。前述では観光客もよそ者であるという捉え方をしたが、確かに観光客も島の外部から来た「よそ者」である。しかし、離島ブームで観光ラッシュを起こし、溢れんばかりに島へやってきた人々の姿は今やもう見えない。大多数の人々が一時のブームでやってきた人々であり、離島ブームは都市からの一方的な資源利用であったといえる。本論文で明らかにしたいことは、新島の地域活動におけるよそ者と島側の関係性であるため、一時的な滞在の観光客は経済的利益や影響はもちろんあるが、地域の仕組みや利害関係に与える影響力が少ないと判断し、本稿で「よそ者」と捉える際には、観光客を除き、地域の取り組みに自発的に参加する地域外出身者として扱う。

島が都市側に資源を提供し、そこから利益を得ることは離島ブームの流れからも容易に成立することが分かる。しかし、交流という相互の働きかけによって機能する要素を取り入れることにより導かれる新たな島の形があるのではないだろうか。地域の外からやってきたよそ者を「資源」と捉え、地域とどのような関係を持ち、地域がどのようによそ者を活用できるかという視点が重要になってくると考えられる。よそ者について語ろうとするとき、どうしても外からの視点に偏ってしまうが、敷田氏が指摘している様に「地域や組織がどのようによそ者と協働できるか」という点が、よそ者がその地で受け入れられていく上で重要であると考ええる。また、玄田(2010)は、「地域の内と外、さらには地域内同士での人と人とのつながり(人的ネットワーク)を広げていく... (中略) ...生活する場が違えば、異なる情報を持っており、異なる経験を共有することから、新しい発想や可能性が生まれてくる。」と地域内外のネットワークを地域再生の条件のひとつとして指摘している。一方で、「地域に希望をもたらす主役はよそ者ではなく、その地域に毎日暮らし、これからも暮らし続ける人々である。ゆるやかなネットワークを地域の内外に築こうとすることで希望はつながっていく。」と述べるように地域側の視点も欠いてはいけなないと考える。新島には地域側が一方的に受容側であるような外部依存の形ではなく、地域住民の主体性と高いモチベーションが感じられた。筆者はよそ者が良い、悪いを述べるのではなく、よそ者と地域がどのような関係を持ち、これからの地域がどのようによそ者と共に地域活動を進めるかという将来的、積極的な視点で捉えたい。以上の地域側がよそ者を活用するという敷田氏、玄田氏のよそ者論の視点を新島における内外の関係性を考察する上での重要な視座として扱っていく。

【1-2】よそ者の役割と効果

では、具体的によそ者は地域に何をもたらすのだろうか。よそ者の役割とその働きについて敷田氏(2009)は以下の5つにまとめている。

- ①地域の再発見効果
- ②誇りの涵養効果
- ③知識移転効果
- ④地域の変容を促進する効果
- ⑤地域とのしがらみのない立場からの解決案の提案

第一に、「地域再発見効果」が挙げられる。地域内アクターは地域の日常の中で生活しているので、地域資源の価値や魅力に慣れきっていて気付かないことが多い。しかし、よそ者は地域に不慣れなために逆にそれを見出すことができる。つまり、外からの視点によって地域で暮らす人々とは異なる価値を認識し、地域の当たり前を貴重な資源や良さとして捉えなおすことができる。第二に、「誇りの涵養効果」がある。外部からの視点を持つよそ者によって地域の資源や魅力が発見されることで、地域の人々が自らの地域への素晴らしさを認識し、誇りを持つことができるというものだ。これは「再発見効果」とは異なり、よそ者と地域内アクターとの十分なコミュニケーションが行われ、優れている評価を伝えるには時間がかかる。したがって、よそ者と地域側が深くかかわることで促進される効果である。第三に「知識移転効果」である。よそ者は地域にない知識や技術を持っている。したがって地域内に新たな知識や技能を持ちこむことで、地域のノウハウの不足を補う効果を期待できる。近年は特に、観光まちづくりのように集客を期待する分野では、情報発信の重要性が増しており、インターネットを活用したホームページ作成や SNS を使った広報や情報収集など地域だけで十分な知識を準備することが難しくなっている。以上のようなノウハウ不足を補完する機能をよそ者に期待することができる。第四に、「地域の変容を促進する効果」がある。よそ者の外部性は異質性とも言い換えることができ、それが地域に驚きや気付きをもたらすことで、地域が変容していく。その地域がもともと持っている資源や知識をよそ者の刺激を利用して変化させることが可能である。第五に「地域とのしがらみのない立場からの解決策の提案」が挙げられる。地縁という人間関係のしがらみに捕われない立場だからこそ、よそ者は優れた解決策を提案できるということである。行政や地域政治、地縁組織から一定の距離を置くことで変革の担い手となる可能性がある。

以上の5つの効果を挙げているが、地域づくりにおいてはこれらの効果が複合的に同時に起きていると考えられ、独立した事象として分離して考えることにあまり意味はなく、むしろよそ者による効果がどのように現れるか、よそ者と地域側との関係性にポイントを置いた考察をするべきであると考えられる。

第2章：離島の地域特性

【2-1】離島とは

「離島」という言葉についてであるが、『離島振興法ガイド』によれば、以下のよう
な説明がされている。

「離島」という用語については、離島振興法上、明確な定義はないが、離島と類似
の言葉として「島嶼」という用語がある。海上保安庁水路部が昭和 61 年に調査した
『海上保安の現況(昭和 62 年度版)』では、最大縮尺海津と陸図を用い、①周囲が 0.1km
以上のもの、②何らかの形で本土とつながっている島について、それが橋・防波堤の
ような細い構造物でつながっている場合は島、それより幅が広がっていて本土と一
体化しているものは除外、③埋立地は除外と定義されている。

この定義によると、2012 年現在、日本は 6,852 の島嶼により構成されている。こ
のうち、本州・北海道・四国・九州及び沖縄本島を除く 6,847 島が離島として位置づ
けられ、258 島(110 市町村)の有人離島が離島振興法による離島振興対策実施地域に
含まれている。この離島振興法(昭和 28 年)により、離島は「本土から隔絶した島」と
規定されているように、離島の地域特性として環海性・隔絶性が挙げられる。周りを
海で囲まれ、主島または大陸から分離し、本土と隔絶されている状況は、生活を維持
していく上で制約も多い。物資や人の輸送手段である航路や航空路は島の生命線であ
るが、これらは天候などの自然条件に大きく左右される上、就航頻度も少ない。その
ために、本土側の公共交通機関と比べて旅客・貨物運賃が著しく割高で、島の生活の
安定と産業の発展に与える影響は計り知れないと言える。また、離島の地域特性とし
て本土と比べて面積が相対的に狭小であることが挙げられる。狭小性と関連して、離
島は、昔から農漁業など自然と密接に関わり、生産のコミュニティが生活のコミュニ
ティと一致しており共同体的な一体意識が強い。これを広井(2009)は「農村型コミュニ
ティ(ムラ社会)」と定義しているが、同じ村に住んで生活を営んでいるという空間
の共有は離島においても同様であり、むしろ狭小性や環海性から「逃げられない」状
況という意識の共有を有することから、よりつながりを強く意識する関係性があると
考えられる。実際に、離島高齢者にとって家族や近隣ネットワークが自立的な生活を
支える社会資源として機能するとの考察が越田(2005)によって行われているが、高齢
者に限らず、離島における近隣住民との結びつきの強さは、離島の特徴である海峡に
囲まれ、島外への移動が容易くないということが理由として挙げられている。また、
このような自然条件のもと、お互いが日常生活で影響を与え合うゆえに、豊かな生活
や安定した生活を送るためには協力関係が求められたということも挙げられるだろ
う。離島地域における高齢者の生活像について、水谷(2001)は、これまで一度も島を
出たことがない高齢者も多く、土地に対する愛着や、親戚も多く住民のほとんどが知

り合いで、お互いに挨拶を交わすことで得られる「心の安らぎ」は高齢者にとって特に貴重な価値であると考察している。人同士との距離が近いことは、離島地域だけではなく農山村地域においても類似した傾向がみられるが、狭小性という点で離島は、村の機能が集落に密集しており、過疎地域と言いつつも一軒一軒が離れているわけでもなく、コミュニティが維持しやすいと考えられる。交通の側面からは、集落が集村的となって、コミュニティの確保と集落移転集中化の必要が少なく公共交通も確保しやすいと奥野(2003)も指摘している。このように、環海性・隔絶性・狭小性という離島の自然的特性は、共同体意識の強さ、閉鎖性などの離島の社会的特性と深く結びついている。

【2-2】 離島振興法からのあゆみ

戦後の日本は、地方と都市の格差是正を目指す地域政策がくり返しおこなわれてきた。しかし、行政の財政悪化、地方分権の流れ、市町村合併など地域振興の課題は依然として山積みであり、離島地域においても、地域主体の自立が強く求められてきている。ここでは、制度的な観点から離島がどのように捉えられてきたのかを整理するため、佐藤(2007)と²吉野(2006)を参照し、離島振興法制定からのあゆみとその背景にある国土開発の流れを合わせて整理する。そのことによって離島地域の制度的な面からの地域振興の経緯と、自立的発展へと向う流れを整理する。

離島の特性として述べたように、離島は、環海性・隔絶性などの厳しい自然的条件が故に多くの面で後進性を有している。離島の性格は、常に本土との関係で考えられ、「後進性」という言葉も日本本土との比較で語られている。このように離島には、後進性をもたらす環海性・隔絶性といった地理的に不利な条件があり、全国総合開発計画とは別に地域振興が図られてきた経緯がある。それが離島振興法の制定である。「後進性を除去し、格差を是正することによって住民生活の安全・向上を図る」ことを目的として、昭和 28 年(1953 年)、議員立法により制定された。この法律は 10 年間の限時法として制定され、制定と期限延長改正時に振興計画が策定されており、昭和 28 年以来、同法にもとづき現行法までに離島振興計画は 5 回にわたって改正・延長を行われてきた。その間、同法に基づく離島振興事業によって、電気・水道、港湾・漁港・道路など、生活と産業の基盤整備が進められてきた。

戦後、荒廃した日本を立て直すため、国土における体系的かつ総合的な地域開発を推進する目的で 1950 年「国土総合開発法」が制定され、産業基盤、生活基盤などの総合的な開発を目指していった。前述した様に、特殊な事情を持つ離島においては、離島の实情に即したより細かい独自の振興策が必要とされるに至り、1953 年に離島振興法が制定された。離島振興法の出発点は、離島の後進性を「本土なみ」に引き上げることにあった。

² 第一章 戦後日本の地域政策(『地域社会学講座 3 地域社会の政策とガバナンス』)参照

離島振興法の第一次（1954～1963年）及び第二次計画（1964～1973）では、生活施設整備などの基礎条件の改善と産業基盤の整備が中心のいわゆる公共事業を中心として、ハード面から後進性の除去を目指すといった点が見られた。1962年に閣議決定された「全国総合開発計画（全総）」では、全国各地に工業を分散させることで、地域間格差の是正と、均衡のとれた発展を目指した。この分散化政策を進めた結果、全国各地に大規模な工業の拠点が開発され、その過程で、社会資本の整備から産業基盤の整備に移行し、離島でも道路や港湾整備に重点が置かれていった。

1969年の「新全国総合開発計画（新全総）」を軸として、政府は本格的に産業分散政策を進めていく。地方に巨大プロジェクトをおこし、国土利用の偏在を是正し、過密過疎、地域格差を解消しようとした。第3次計画（1974～1983）はこの新全総に対応しており、産業の振興と社会生活環境の整備に重点をおいた。その際に離島振興対象の離島には、自然条件や社会構造の異なる多様な性格を持つ点を考慮し、島を5類型に性格分類し、その類型別に政策目標を設定した。類型は、航路状況と人口規模から、①内海・本土近接型離島、②外海・本土近接型離島、③群島型離島、④孤立大型離島、⑤孤立小型離島の5つ分類される。この類型区分は、第5次計画まで受け継がれている。産業基盤の整備政策により、地方の産業構造や生活構造は劇的に変化した。特に離島は国や県からの公共事業による補助率が非常に高く、これによる産業基盤の整備は、主要産業である農業、漁業の基本整備となった。一方で公共資金の島内流入、本土資本の市場化となった結果、従来の自給社会から市場社会へと組み込まれていくこととなり、自らの努力による振興に期待しない外部への依存率が高い現在の離島の地域構造に結びついていくこととなる。

第4次計画（1984～1994）は、1977年「第三次全国総合開発計画（三全総）」に対応しており、この第4次計画で、特に各島のポテンシャルの再発見や離島住民の自主的努力が強調され、ハード面だけでなくソフト面を多く加える方向への動きが出てくる。それも、三全総が理念として掲げた定住構想に基づき、人間居住のための総合的環境の形成を図ることが目標とされたことに関連する。工業開発優先から脱却し、地方都市と周辺農山漁村の一体的整備が目指された。そのため、離島においても、交通の総合化・体系化、それぞれの離島が持つ特性を生かした産業の自立的な振興、離島の類型に基づく生活環境の整備の3点に重点がおかれた。

そして、第5次計画（1995～2004）では、1987年「第四次全国総合開発計画（四全総）」と対応し、大幅な内容的追加のおこなわれた改正離島振興法をふまえて、³離島の位置づけと役割が明記され、教育文化などソフト面が多く盛り込まれるようになった。類型別の振興方針をより明確にするとともに、ハード・ソフト両面にわたって総合的かつ戦略的な離島振興対策を推進することとしている。1998年には四全総の

³ 離島の役割を「国土の保全」「海洋資源の利用」「自然環境の保全」等と明記し、国土として、また国民共通の重要な財産としてとしての位置づけを明確にした。

後を受け「21世紀の国土のグランドデザイン」が閣議決定された。「地域の選択と責任に基づく主体的な地域づくりを重視して、多様な主体の参加と相互の連携によって国土づくりを進める」ことを指針とし、「多自然居住地域の創造」「大都市のリノベーション」「地域連携軸の展開」「広域国際交流圏の形成」の4つの戦略を立てた。

離島振興計画の最新の第6次計画では、これまでの国土の均衡ある発展を目指す後進性の除去という振興の目的から、「離島の地理的・自然的特性を生かした振興」「地域の創意工夫による自立的発展の促進」という大きな振興の方向性が示された。また、計画決定制度の改正として、地域における創意工夫を生かしつつ、離島の自立的発展を促進するため、国が離島振興計画を定める現行の制度を改め、国が作成した「離島振興基本方針」に基づき、市町村が計画案を作成し、都道府県が離島振興計画を定めるものとされた。

以上のような国土開発を背景とした地域政策の大きな流れを追うことで、離島地域においてもハード面からソフト面を重視した計画に移行していったことが分かる。伊豆諸島における「東京都離島振興計画」(平成15年4月)では、離島振興の目的は、「島の個性に着目した振興、すなわち価値ある地域差の発揮による発展」であることを踏まえた上で、価値ある地域差の発揮を「潜在的な地域資源のポテンシャルを最大限に生かした非日常的癒しの空間の創出」と捉え、今後10年間の広域的な振興の基本理念としている。「価値ある差」という表現が何度も強調されるように、今度の離島振興の方向性として、地域の自然条件や資源といったその地域の独自性をいかに創出するかが求められている時代だと考えられる。離島における不利的条件をいくつか挙げてきたが、逆に言えばその点が他地域とは異なる独自性であり、自然の豊かさ、非日常の演出など活かせる部分である。それぞれの離島の資源や文化などの活用により、地域の活性化の可能性を活かす戦略的な島づくりが必要とされるだろう。そのためにも、国・自治体が行う公共事業による地域活性化が図られてきた流れから脱却し、島自らの力で発展する地域運営の仕組みが求められている。

区分	第一次計画	第二次計画	第三次計画	第四次計画	第五次計画	第六次計画
計画期間	昭和28年～昭和37年度	昭和38年～47年度	昭和48年～57年度	昭和58年～平成4年度	平成5年～14年度	平成15年～平成24年度

計画の目標		経済力の培養，島民生活の安定，福祉の向上	同左	人間居住の総合的環境の整備	島の特性を生かしつつ安定した生活圏を確率するとともに、活動機会を創設し、その役割を果たしうる開かれた離島を創設し、ひいては多極分散型の国土形成に資する。	「地域の選択と責任に基づく主体的な地域づくりを重視して、多様な主体の参加と相互の連携によって国土づくりを進める」
全国総合開発計画	<p> 全国総合開発計画 拠点開発構想 </p>	新全国総合開発計画 (44.5.30) 巨大プロジェクト構想	第三次全国総合開発計画 (52.11.4) 定住構想	第四次全国総合開発計画 (62.6.30) 多極分散型構想	21世紀の国土 グランドデザイン (10.3.31) 参加と連携	ハード → ソフト

4表 1 離島振興計画と全国総合開発計画の流れ

4吉野(2006)をもとに『地域社会学講座3 地域社会の政策とガバナンス』を参照し作成)

第3章 新島の地域特性

【3-1】新島の概況

5 (1) 概況

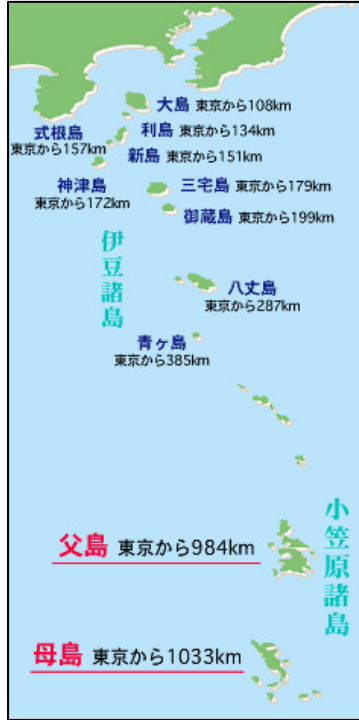


図1 伊豆諸島外観

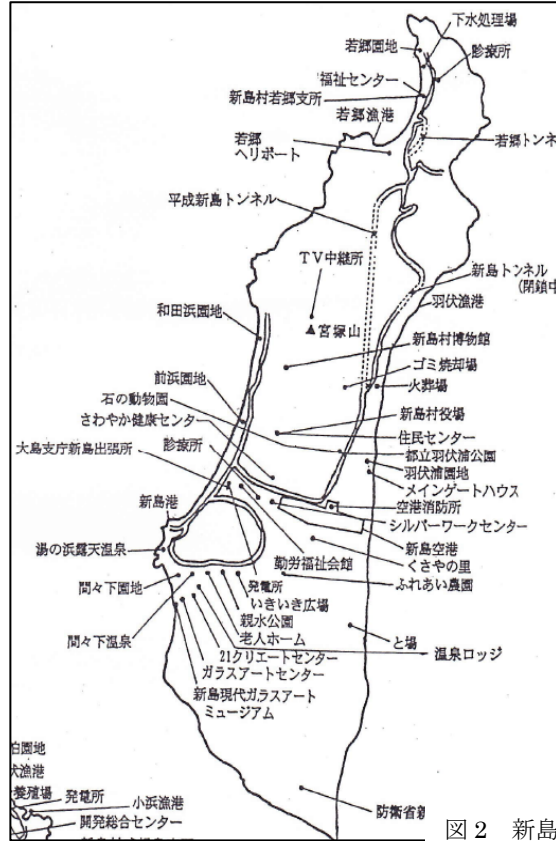


図2 新島外観

東京竹芝桟橋からフェリーに乗って

9 時間程の距離に新島はある。伊豆諸島を構成する島の一つであるが、伊豆諸島は、東京の南方約 100～350 km までの太平洋上に連なる有人 9 島と大小 100 以上の島からなる。新島は東京都心から南南西へ約 160km、静岡県下田市から南東に 36km の北緯 34°22′東経 139°15′の位置にある。東西 3.2 km、南北 12.2 km、面積 23.87 km²の南北に細長い島であり、伊豆七島の中で 4 番目の大きさである。視界が良い日には、高台から伊豆半島、大島、利島、三宅、御蔵、八丈と、伊豆諸島の島々を遠望することができ、伊豆七島のちょうど中間の位置に所在することが分かる。この新島は若郷・本村の 2 つの集落から構成され、南方約 5 km の海上に浮かぶ式根島を合わせて、東京都新島村である。式根島は、面積は 3.9 km²と新島の 6 分の 1 程の大きさであり、新島からは村営の連絡船「にしき」で 10 分程の距離にある。このように 2 つで 1 つの行政区となっており、「伊豆七島」という呼称に式根島は含まれていない。本村、若郷が新島、式根島地区が式根島であり、同じ行政区と云えども、島が異なれば、自然条件に密接に関わった島の産業構造や生活環境も異なるため、本稿では、新島にのみ焦点を当て、本村・若郷地区を取り上げることとする。

5 出典：小笠原村ホームページ

新島は地形の起伏が激しいが、宮塚山を最高点とする北部の山地と本村地区がある低地とに分けることができる。この本村に港や役場などの中心機能が集結しており、車のみ通行可のトンネルを抜けたところに若郷地区がある。本村と若郷は、かつては別々のむらとして存在していたが、昭和 29 年に合併した。2つの集落は約 7 km 離れており、平成 12 年に発生した「新島近海地震」により、既設の都道が使用不可能となったため、新たにトンネルが設けられ今に至る。南側にある向山は、世界的に珍しいコーガ石という石材が採掘されており、日本で唯一の産出地として産業の一つとしても重要な位置を占めていた。地理的に見たときに、新島は南北を山で挟まれその間の平坦地に集落が構成されているという特徴があることが分かる。離島の特性でも述べたように、集落の密集さが地域コミュニティの強さにも結びついていると考えられ、新島では「モヤイの精神」と呼ばれる相互扶助の精神が、今でも生活習慣、冠婚葬祭の中で受け継がれている。また、他の伊豆諸島の島々に比べ平坦な道が多く、高齢者が外を歩き回る姿も多く見られ、このような生活圏の密度の高さは共同体意識にも影響していると考えられる。東海岸には、新東京百景にも指定されている羽伏浦海岸というサーフポイントで有名なビーチがあり、夏には多くの若者達でにぎわっている。気候は年間を通じてやや温暖で、常夏と言うことは無いが、本土の東京より暖かく、降雪することはめったに無い。また、外洋に面しているため風が強い日が多く、特に冬は強い西風が毎日のように吹き、交通機関に大きな影響を及ぼす。

(2) 人口 一人口の二極化一

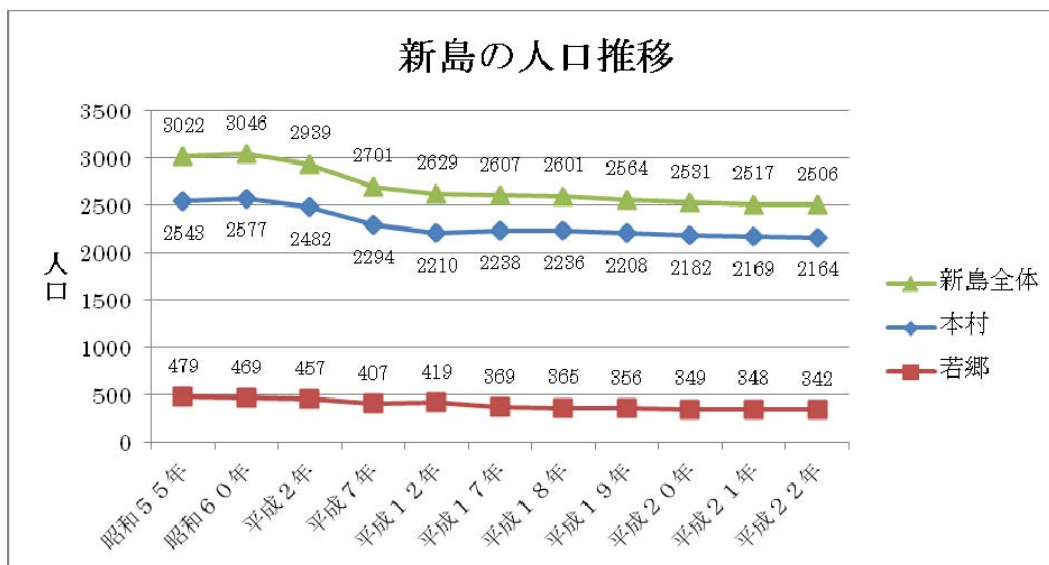


図3 新島の人口の推移(『新島村総合計画 後期基本計画平成 23 年 3 月』より作成)

図 3 は本村・若郷それぞれの人口推移を現しているグラフである。昭和 55 年から 60 年の離島ブーム後半には約 3,000 人の人口があった。この時期に一度過疎地域の

適用を除外されたが、再び人口は減少していき、平成12年に「過疎地域自立促進特別措置法」の適用を受け、現在過疎地域として再度指定されるに至っている。近年はおよそ2500人で横ばいである。また、人口減少もそうであるが、年齢構成のバランスが悪化している。

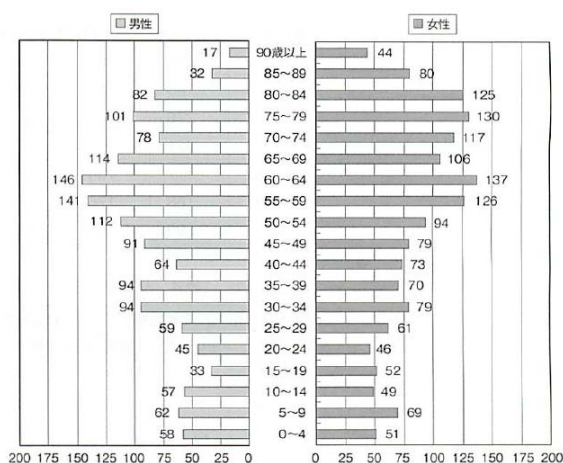


図4 年齢別人口構成比の推移 (平成23年 データにいじま)

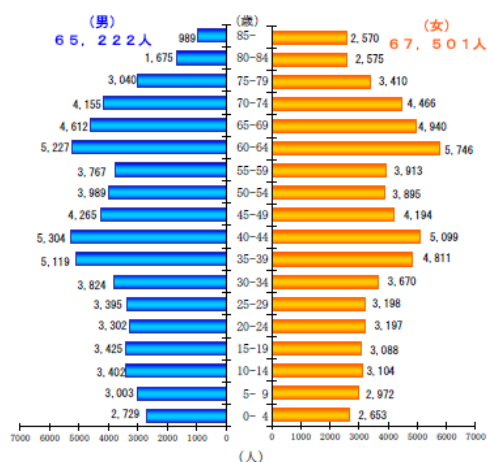
区分 年	自然動態			社会動態			増減人口	婚姻	離婚	死産
	出生	死亡	増減	転入	転出	増減				
昭和60年	34	44	△10	133	177	△44	△54	10	0	1
平成2年	17	33	△16	199	221	△22	△38	14	3	0
7	27	40	△13	184	190	△6	△19	9	4	0
12	20	39	△19	175	200	△25	△44	13	3	0
17	23	36	△13	167	118	49	34	12	4	0
18	29	46	△17	130	148	△18	△33	10	3	0
19	18	38	△20	139	163	△24	△44	10	1	0
20	19	45	△26	152	163	△11	△37	14	2	0
21	15	42	△27	137	128	9	△18	15	0	0
22	15	41	△26	142	125	17	△9	27	4	0

図5 人口動態 (平成23年 データにいじま)

図4は新島村の年齢別構成比の推移を表したものである。平成12年度から22年度の10年間の推移を見てみると、年少人口(0~14歳)は11.8%から10.9%へ0.9減少し、生産年齢人口(15~64歳)は57.5%から54.9%とこちらも2.4減少している。一方で、老年人口(65歳以上)は、老年人口が全体の3割以上を占めており、30.7%から34.2%と3.5増加している。図5は、新島村の人口動態を表しているものである。転入者は12年度の175人から22年度は142人と年々減少傾向を示しているが、転出者も200人から125人と減ってきている。自然減よりも社会減の方がやや大きいことが分かる。新島には、小・中・高が1校ずつあり、進学するにせよ、就職するにせよ高校卒業とともに生徒の大半が島を出て行くこととなる。このようなライフスタイルからも若者層の流出と、高齢化に伴って人口の二極化を生んでいる。



6図6 新島村5歳階級別人口ピラミッド
(平成22年1月1日現在)



7図7 全国人口ピラミッド
(平成24年10月1日)

図6.7は、それぞれ新島（式根島含む）と日本全体の5歳階級別人口ピラミッドの図である。両者を比較してみると、新島の人口の二極化が全国に比べより際立っていることが分かる。生産年齢人口の層が薄く、中でも15歳から29歳の階層が少ない。つまり家庭をつくり、子どもを生む世代の層が抜けてしまっているのである。以上のグラフから、高齢化と生産年齢人口の空洞化による人口の二極化が起こっていることがわかり、将来の島の担い手となる人材が減少していることが他の離島と同様に重要な問題として指摘できる。

【3-2】新島の歴史

次に、⁸新島の歴史について、いつから島に人が住み始めたのかというところから、流人の島として歩んできた歴史、そして現在の島の生活に多くの影響を及ぼした離島ブームの時代、そしてサーフィンとの関わりについて述べていく。

(1) 沿革

伊豆諸島は、大島、利島、新島とその属島である式根島、神津島、三宅島、御蔵島、八丈島、青ヶ島から成り、これらを合わせて伊豆七島と総称されている。約200万年前に形成された伊豆諸島の島々の中でも、最も早く人が暮らし始めたのが、約8,200年前の神津島であった。そこから新島村に縄文人が渡ったのは、遺跡や出土品から約6,500年前の縄文時代早朝後半になってからのことだと言われている。

古代から中世にかけての新島に関する資料は数少なく、神話・伝説の中にある。⁹「三

⁶ 出典：『新島村総合計画 後期基本計画平成23年3月』

⁷ 出典：『愛知県瀬戸市HP』 <<http://www.city.seto.aichi.jp>>

⁸ 歴史に関して『新島村史』を参照した。

⁹ 『三宅旧記』を引用して、「髪、潮泡ヲ聚(アツ)メテ築セ玉ヘハ、島ノ色白キ、故新島(アタラジマ)ト名付ク」と述べている。

宅旧記」¹⁰『扶桑略紀』に新島の成り立ちに関する記述がある。中世の新島に関する資料は、新島本村にある三松山長栄寺に残されている「伊豆国加茂郡新島三松山長栄寺歴祖次第」や新島に残る豊臣秀吉の「禁制」が現存するのみである。このように、考古の遺跡から島の様子をうかがうことはできるが、¹¹伊豆諸島が日本の歴史にあらわれたのは、流刑の地となってからで、日本書紀にみられるところである。

鎌倉幕府直轄地から戦国時代の北条氏、その後、伊豆七島は1590年（天正18年）江戸城に入った徳川家康が関八州とともにその支配下に組み込まれ、徳川氏による支配が開始された。伊豆七島の中でも、新島・三宅島・八丈島の三島は、明治の初めの流人制度が廃止されるまで、三島合わせて5,000人に達する流人が遠島に処せられている。島に残る「流人帳」によると、寛文8年(1668年)から明治4年(1871年)までの約200年間で、1,333人もの流刑者が送りこまれたとされている。

この流刑制度が廃止されたのは、明治になってからのことで、明治維新を機に、新島も近代国家への道を歩んで行くこととなる。明治4年の廃藩置県後、伊豆七島は足柄県に属していたが、明治9年の消滅により、静岡県に編入された。そして明治11年、伊豆七島は静岡県から東京都へ移管され、学校などの公共施設から徐々に整備され、離島振興法の下離島の隔絶性を取り除くことに力が注がれていった。明治32年、新島村は大島支庁の管轄となり、新島出張所が置かれた。戦時の新島は、昭和21年1月GHQ指令により、伊豆諸島は奄美諸島、琉球諸島、小笠原諸島などとともに、日本政府の行政権を停止され、本土より一時分離されることになったが、同年3月に分離は終わり、2ヵ月足らずで日本に復帰する。昭和45年に制定された「過疎地域対策緊急措置法」の適用を受け、離島振興法と併せて各種事業がおこなわれてきた。昭和55年に一度過疎地域の適用を除外されたが、平成12年に施行された「過疎地域自立促進特別措置法」の適用を受け、現在は過疎地域として再度指定されるに至っている。平成4年4月1日、それまでの自治体名称であった「新島本村（にいじまほんむら）」を新たに「新島村」へと改め、現在に至る。

（2）流人の島

沿革で述べたように、もともと伊豆諸島は罪を犯したものが流される流人の島であった。刑罰を定めた最も古い法律である大宝律令において、「笞・杖・徒・流・死」の五刑が定められている。その後、江戸時代になると、流刑は孤島への追放刑となり、俗に「島流し・遠島(おんとう)」と言われた。徳川幕府の直轄地に編入された伊豆諸島は、定流刑地として本土と隔絶された状態におかれた。中でも新島は、近流＝軽犯罪者が流される島であり、特に、徳川家の地盤固めのために政治犯や江戸幕府に反対する不敬罪の者らが流された。流人たちは島に慣れるまで島の5人組の中に入れられ、

¹⁰ 『扶桑略紀』 仁和三(八八七)十一月二日条に伊豆国の新生する島の国に「神明火ヲ放ち以テ潮ノ焼ク所、則チ銀岳ノ如シ、其ノ頂緑雲ノ気アリ」と紹介している。

¹¹ 『離島振興対策調査書』P54

それ以後は農漁業に携わることで報酬を受け取るなど何らかの形で自活しなければならなかった。しかし、自活できない者がいた場合、受け持ちの5人組が順番にその流人を養わなければならなかった上、流人が犯罪をした場合には、彼らが身受け人になるなど、島人にとって流人たちは実に迷惑な厄介者であったという記述が残っている。このように、この時代の伊豆諸島は流人との共同生活にあり、島人にとって流人はただのお荷物であったかのような印象を受ける。しかし一方で、流人の中には外から来た者として島に技術や文化をもたらし、島の発展に貢献した者もいた。新島村博物館に保存されている流人に関する資料からいくつか例を取り挙げて紹介する。天佑本院(てんゆうほんいん)は、出羽国羽黒山の別当で、自らの一山を再興させるため、宗教上や領土改革に尽力した人物であるが、改革に反対する者により、寛文8年(1668年)に75歳で新島へと流された。彼は、書・絵画・彫刻・造園などの才能を持っており、島の人々には読み書きそろばん、農耕技術などの指導をおこない、島の文化向上のために尽力したと伝えられている。また、上平主税(かみだいらいちから)は、大和の郷士であったが、明治3年(1870年)、参議横井小楠暗殺に連座したとして、47歳で流された。在島中島で天然痘が流行しており、多くの死者を出していたところ、医者的心得があった主税は、「種痘自訴書」を足柄県庁に提出し、種痘を実施して人命救助に尽力した。その後も、産婆術を教え、寺子屋を開くなど、島民の教育にあたり、子弟の中から村長や教員などを生み出した。釈免後もしばらく島にとどまり島民のために尽くしたとされる。相馬主殿(そうまもの)は、常陸の生まれで新撰組の隊士として、勝海舟、大久保利通、土方歳三等に信頼される人物であったが、明治3年坂本龍馬暗殺の疑いで新島に流されてきた。彼は、島で寺子屋を開き、子どもの教育に努め、良き師として慕われたという。以上のように、流人の中には島の社会・経済・文化などの分野の発展に貢献した人物も存在し、島の発展に与えた影響は少なからず大きいことが分かる。このような江戸時代に形成された流人の島としての歴史が新島にはあり、島人にとって、よそ者は昔も現在も「何か新しいものをもたらしてくれる存在」として認識されていたと言える。

(3) 離島ブームとサーフカルチャー

島と聞いて沖縄のような南の島々を思い浮かべる人は多いと考える。青い海に、白い砂浜といったいわゆるリゾート地としてのイメージあるように、沖縄は現在でも人気の高い観光地として広くメディアでも取り上げられ、その評価も高い。しかし、沖縄に限らず、日本では離島が一世を風靡する時代があった。1960年代後半からの離島ブームである。とくにその発端としてメディアの影響は大きく、旅行月刊誌『旅』では、1968年6月号で「船旅と離島の旅情」、そして1978年6月号では「島へ・利尻から沖縄まで」と題する離島特集を組んでいる。また、ブルー・ガイドブック・シリーズでは、1968年に『伊豆七島』(渡辺正臣著)が出ており、このような観光情報

が整ったこともあり、伊豆諸島は関心を集め、大量の観光客が押し寄せることとなった。伊豆諸島の一つであるこの新島も「ナンパ島」として大きくメディアで取り上げられ、多くの若者達を魅了し、観光に湧いた。また、新島はサーフィンのメッカとして有名である。¹²毎年夏には多くのサーファーが訪れ、日本サーフィン連盟（NSA）や日本プロサーフィン連盟（JPSA）などの大きい競技会も開催されている。NSAの日本選手権は1966年から2010年の間に45回開催されており、その45年の歴史の中で、10回以上開催されているのは新島だけである。新島のサーフ・スポットとしては、新島の東側にある長さ6.5kmにわたる白い砂浜が続く羽伏浦海岸が有名である。この新島におけるサーフカルチャーも離島ブームを背景に発展していく。日本におけるサーフィンは1960年代前後に神奈川県湘南や千葉県の外房などで始まったというのが定説であるが、新島の青年が湘南のヨットハーバーに出稼ぎに行った際に、サーフィンを知り、湘南サーファーに新島の波を紹介したことがきっかけとなり、新島にサーファーが来島したという。そして1960年代後半、ちょうど離島ブームの始まりと同時期に、新島観光協会は東海汽船とともに「新島でのサーフィン」をアピールし、キャンペーン、大会誘致に乗り出したとされる。

新島はサーフィンの名所になった。島のサーフビーチ・羽伏浦には、色とりどりのサーフボードをかついだ若者が、連日のようにあふれる。数年前までは、人影もまばらだったのに……。

この五月、伊豆の下田からやってきた看板屋は、島に着いたとたん注文殺到で、三カ月近くも書き続けた。スナック、みやげ屋、食堂、パチンコ、アーチェリー、喫茶店、ビヤホール。島内には、観光客相手のあらゆる商売がお目見えして、「今年は、新しい看板が九十本もできた」と、島の人がいう。

朝十時ごろ、羽伏浦への都道は若者の行列は続く。海岸は、ビーチパラソルや派手なロック・フェスティバルまで出現して、深夜まで若者の群れがエレキのリズムで踊り狂う。(1971年8月2日 朝日新聞朝刊 24ページ ロックとサーフィン レジャー天国に生れ変わる新島—島部／東京)

このように新島のサーフカルチャーは離島ブームが追い風となり、一気に発展していった。

¹²サーフィンに記述に関しては小林勝法・西田亮介・松本秀夫『新島におけるサーフィンによる観光誘致の経緯(2012)』を参照。

宿泊数算出結果			観光客内訳		宿泊数内訳		
分類	新島	式根	項目	新島	式根島	新島	式根島
観光	61%	87%	サーフィン	42%	0%	25%	0%
			釣り	6%	17%	4%	15%
			ダイビング	4%	7%	2%	6%
			海水浴	37%	59%	22%	51%
			団体合宿	5%	7%	3%	6%
			ハイキング	3%	4%	2%	3%
			湯治	1%	4%	1%	4%
			その他	4%	1%	2%	1%
仕事	38%	13%	公共工事			11%	3%
			防衛庁			11%	0%
			民間			15%	11%
その他	1%	0%	その他			1%	0%

13 図8 観光客の来島目的内訳

図8は2009年に新島商工会がおこなった実態調査の結果をまとめた一つである。観光客の来島目的の内訳を新島、式根島それぞれ示している。これを見ると、新島に観光目的で来島する人の内、42%がサーフィンを目的としており最も多い。続いて海水浴が37%と、他の項目に圧倒的な差をつけてこの2つが際立っている。このように夏期集中型の特徴を持つ新島の観光において、現在でもサーフィンは重要な観光資源となっていることが分かる。

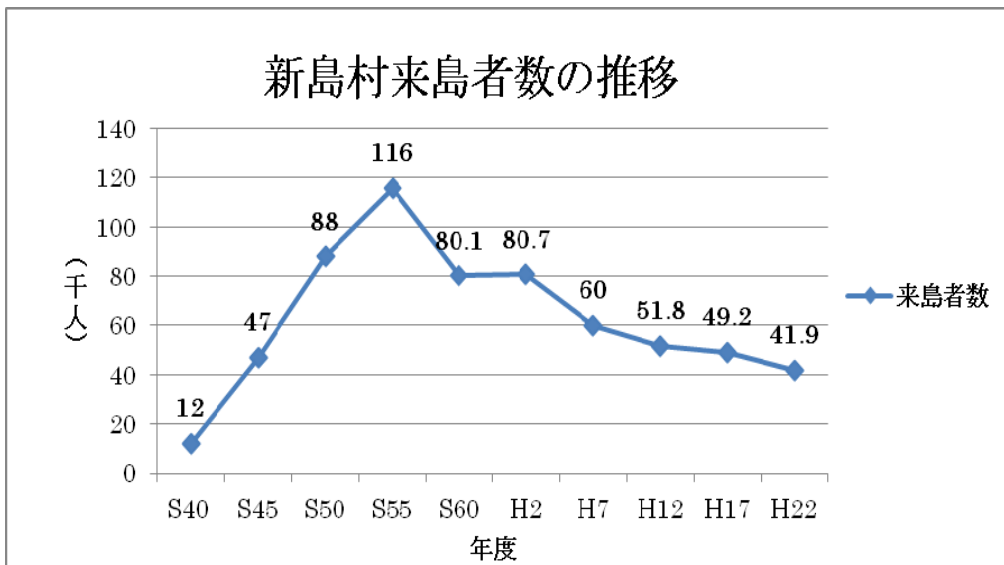


図9 新島村来島者数の推移(離島統計年報「⑬観光客数・宿泊能力」より作成)

13 出典：新島村商工会 2009『宿泊事業者アンケートを基にした来島者分析』新島村商工会の宿泊事業のアンケートから、宿泊客の内訳を算出したもの。データは新島のみ。

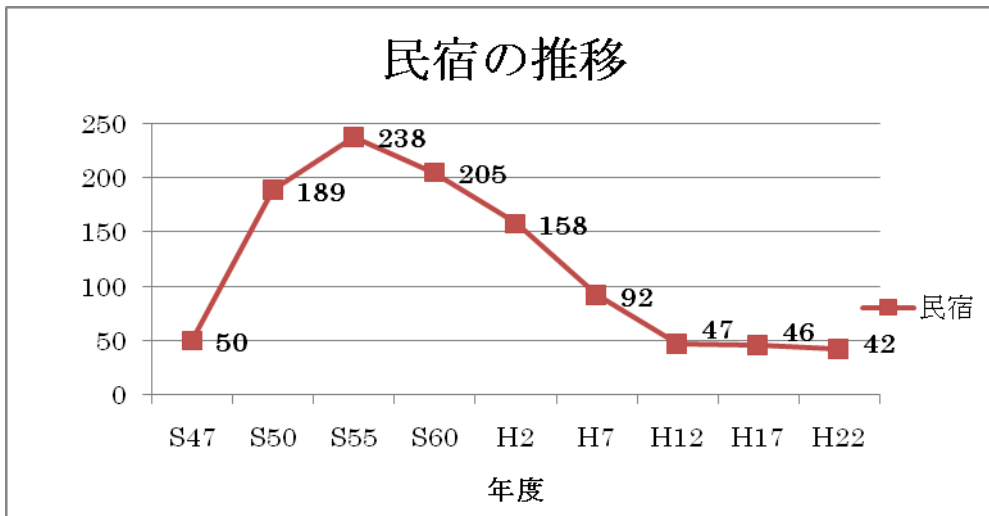


図 10 民宿の推移(離島統計年報「⑬観光客数・宿泊能力」より作成)

図 9 は新島(式根島を除く)における昭和 40 年代から平成 22 年度までの 5 年ごとの観光客数の推移を離島統計年報より作成したグラフである。しかし、この数値には仕事利用や島民の利用も含まれているため、観光客ではなく「来島者」として考える。ここでは、離島ブーム前後の島内への人の流入の変化とそれに伴うサービス業の影響を分かりやすく捉えるためにこのデータを扱うこととする。離島ブームが始まった昭和 40 年代から急激に来島者が増加していることが顕著に見て取れる。新島におけるピークは昭和 55 年であり、11 万 6 千人もの人が訪れた。50~55 年にかけて 32% の増加が見られたが、レジャーの多様化や海外旅行志向が強まるに伴い、離島ブームは沈静化し、その直後の 55~60 年には増加分がそのまま減少してしまっている。そこから平成 2 年にかけて横ばいが続くもののその減少傾向は止まらない。

続いて、図 10 を見てみる。これは新島村における民宿の数の推移を表している。昭和 47 年以前の離島統計年報には宿泊数のデータが見当たらなかったため、昭和 47 年から平成 22 年までのデータを記すが、図 9 と同様の推移を示していることが分かる。来島者数のピークである昭和 55 年にかけて急激に民宿の数も増えていき、昭和 55 年は 238 もの民宿があった。昭和 47 年には 50 しかなかった民宿が、3 年後にはその 3 倍以上に、10 年足らずで 4 倍以上にもなったことから、離島ブームがどれほど島の産業に影響を与えたかが推測できる。離島ブームの去った 55 年以降は来島者の減少に伴い、当然のように民宿の数も減っていった。平成 12 年には離島ブーム以前の数も下回り、現在も減少を続けている。このように、いかに離島ブームが島の風景、産業に影響を与え、新島の環境を変えていったということが想像できるだろう。

離島ブーム当時の様子を「とにかくすごかった」という一言で島民は語る。東京から新島へ行く船は人が重なり合う程満杯で、島では人で道路が埋まってしまい先へ進むのも難しいほどだったと言う。民宿に泊まりきれない人々を民家に泊まらせたとい

う話もよく聞いた。

70～80年代前半。吉田拓郎の篠島コンサート（愛知県）の前後に若者の離島ブームが沸き起こった。東京では大挙して新島を目指した。狭い島内には、若さの特権を謳歌（おうか）する男女の喧騒（けんそう）があふれ、「ナンパ島」という言われ方もした。「あのころのことには触れて欲しくないね」。当時の状況にまゆをひそめる島民は今も少なくない。

そんな島のイメージがすっかり変わった。4軒あったディスコも1軒になり、その1軒も今年も休業した。250軒あった民宿も50軒に。海外旅行ブームや地震の影響で観光客離れに拍車がかかった。4月からは高速ジェット船が就航、竹芝桟橋から夜行船で10時間かかったのが2時間20分に短縮されたが、島の将来像はなかなか見えない。（2002年8月31日 朝日新聞朝刊 31 ページN I I J I M A ブーム去り、将来像探す（夏に恋する） /東京）

上記の朝日新聞の記事が当時の新島の様子とその後の変化を分かりやすく記しているが、観光業が台頭し、島を支える主産業として育った中で、離島ブームが去ってしまったことは、島の将来にとって大きな不安を抱える問題である。

「どうして新島が今こんなに落ち込んだかって、みんな努力しなかったから、黙っててもお客がきたから」と語ってくれたのは新島で商店を営む男性である。7月中旬～8月末の観光がピークの期間は毎日数百万の売上をあげていた。何だって売れた。黙っても人がくる時代だった。このブームで一躍新島の主要産業となった観光業であるが、何もしなくても儲かった時代は終わり、今後はどうしたら島に来てもらえるか試行錯誤する時代へと入っていく。観光についてもっと勉強しなければいけないと彼は語るが多くの島の人は「どうせ夏がくればお客がくると思っている」と話してくれた。このように夏の一ヶ月だけで一年分の生活費を稼ぐという仕組みは今もあまり変わっていない様子である。去年に比べ今年も人は減ったと飲食店や民宿を営む島民が話しているのを聞いたように確実に観光客は減っているということを島民たちも分かっているのだ。しかし、待っていても客はくるといふ離島ブームの時代の経験から、大半の観光事業者は夏の収入だけに依存し、将来への危機感は薄い。

【3-3】新島の産業—観光業への依存、公共事業への依存—

【1-2】で、離島の公共事業依存の過程に触れ、【2-2】では、離島ブームの背景から観光依存体質について触れたが、ここではグラフを参照して改めて新島の地域構造を把握する。

区分	年	45	50	55	60	H2	H7	H12	H17		内訳	
									従業者数	比率(%)	男	女
総	数	1,789	1,669	1,667	1,703	1,775	1,691	1,540	1,625	100.0	994	631
第 1 次 産 業		367	196	209	268	136	141	129	113	7.0	97	16
農 業		117	31	29	96	43	37	18	30	1.9	15	15
林 業		5	0	0	-	-	-	-	-	0.0	-	-
漁 業		245	165	180	172	93	104	111	83	5.1	82	1
第 2 次 産 業		528	566	543	494	492	452	396	378	23.3	318	60
鉱 業		109	80	45	21	19	18	7	-	0.0	-	-
建 設 業		305	339	336	306	306	308	297	305	18.8	272	33
製 造 業		114	147	162	167	167	126	92	73	4.5	46	27
第 3 次 産 業		894	894	911	935	1,135	1,091	1,014	1,109	68.2	565	544
電 気・ガ 斯・水 道		-	19	21	20	21	23	26	27	1.7	20	7
運 輸・通 信		143	97	100	90	89	71	101	67	4.1	48	19
情 報 通 信 業									5	0.3	4	1
運 輸 業					62	3.8	44	18				
卸 売 小 売 業		302	296	272	276	278	297	238	217	13.3	78	139
金 融 不 動 産		11	12	19	21	17	18	17	16	1.0	9	7
金 融・保 険 業									15	0.9	9	6
不 動 産 業									1	0.1	0	1
サ ー ビ ス 業		292	336	375	396	608	546	519	662	40.7	313	349
飲 食 業・宿 泊 業									183	11.2	54	129
医 療・福 祉									106	6.5	25	81
教 育・学 習 支 援 業									110	6.8	68	42
複 合 サ ー ビ ス 業									58	3.6	46	12
サ ー ビ ス 業 (他 に 分 類 さ れ な い も の)									205	12.6	120	85
公 務		146	134	124	132	122	136	113	120	7.4	97	23
分 類 不 能 の 産 業		-	13	4	6	12	7	1	25	1.5	14	11

図 11 産業別就業人口の推移及び就業構造(データにいじま)

図 11 は新島村の産業別就業人口の推移と就業構造を示している。離島ブーム以前の島々は第一次産業を中心とした自給自足の生活を送ってきた。新島も他の島同様、農漁業を軸とした生活であったが、離島ブームの到来による外部資本の流入により、地域産業の構造は大きく変わってしまった。漁業に関して、新島は黒潮に乗って集まる魚が豊富で、一年中に渡って様々な魚が水揚げされている。担い手である漁業協同組合は、新島漁協、若郷漁協、式根島漁協の三組合である。漁業従事者は、昭和 45 年 245 人であったのが、離島ブーム後の平成 2 年には 93 人と 100 人を切った。平成 17 年の時点で、就業者数が 83 人となっている。近年は、漁業者の高齢化、海岸浸食に伴い就業数のますますの減少が懸念される。

同様に新島の農業も平成 17 に年における農業従事者は、全就業者数 1,625 人の 2% にも満たない 30 人である。昭和 45 年に 117 人、以降急激に減少し、平成 2 年は 43 人、平成 12 年に 18 人に減ってしまっている。就業者数は新島における産業として見た場合、その数値は非常に微々たるものと言わざるを得ない。就業人口の激減・高齢化に伴い耕作放棄・遊休農地が増大し、全体として衰退傾向を辿っている。しかし、それは産業として捉えた場合であり、実際には自給目的の農業をしている人々が多い。そのような農家を支える営農支援や、島外に新島産の作物をより多く出荷できるようサポートする農業ビジネス支援などを行っているのが新島村ふれあい農園である。後述するウェディング事業にも関係するアクターの一つである。島でとれる作物は、自然条件から水田が皆無であるため、米に代わる主食としてサツマイモと麦が中心であ

った。現在でもサツマイモはつくられており、水はけの良い新島は、たまねぎ、らっきょ、明日場など多くの種類の野菜が採れる。狭い面積のなかで、自給的な農業を行うので、少量多品種という傾向がある。(小林 2010)ここ数年、もともと売る目的で栽培してなかったこれらの作物が売れる仕組みをつくっていかうとする動きが出ている。

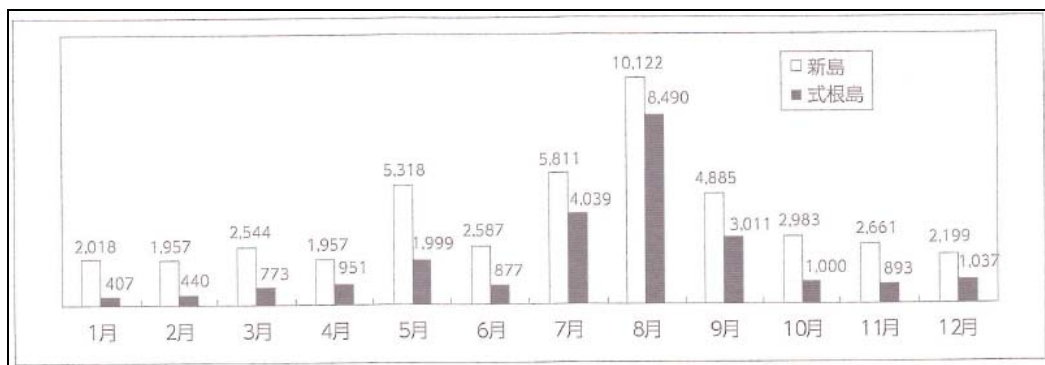
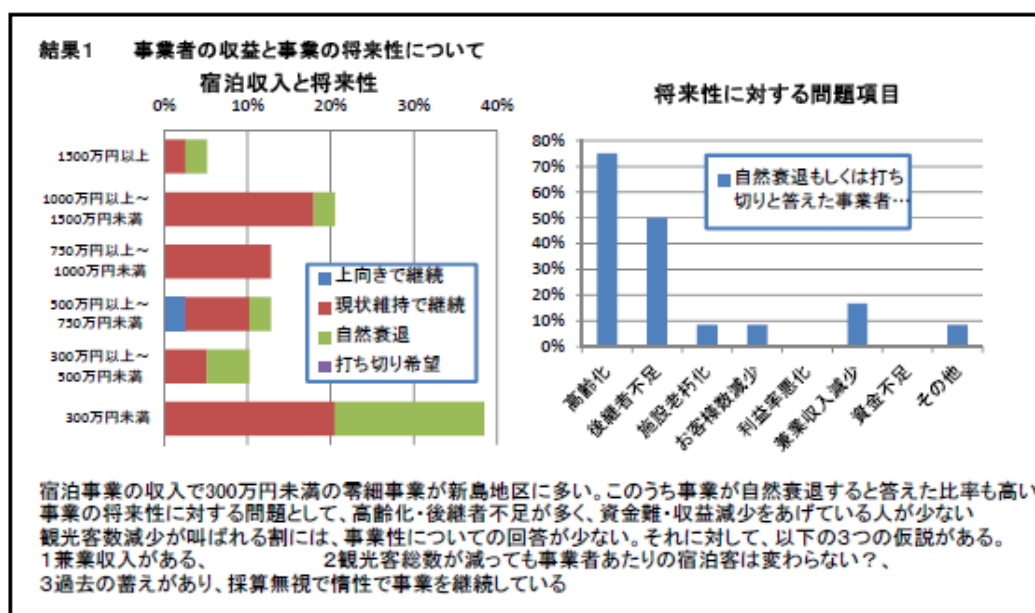


図 12 月別来島者数(平成 22 年 1 月 1 日～12 月 31 日データ新島)



¹⁴図 13 事業者の収益と事業の将来性について

同じく図 11 を見たときに、68.2%と第三次産業に占める割合が高い。その内、卸売小売業と飲食業・宿泊業が個別で高い割合を示しており、前述した離島ブームの背景から、こうした観光サービス業の割合が増していった。図 12 は新島、式根島の年間の観光客数を月ごとに表したものであるが、これを見て明らかのように、来島者数が7月8月の夏季に集中している。来島者の目的は図 8 より、観光(61%)目的の内訳

¹⁴出典：新島村商工会 2009『宿泊事業者アンケートを基にした来島者分析』

が、サーフィン(42%)、海水浴(37%)、釣り(6%)とマリンスポーツに集中しており、夏季集中型の観光は離島ブーム時代から変わっていない。来島層もサーファーを中心とした若年層に集中しており、これは新島の特徴と言える。このように観光客の3分の1が8月に集中する夏季集中型の集客構造は、夏でその一年分の生活費を稼ぐという島民の生活や経済に不安定さをもたらしている。小売業などの商業も来島者数の状況により大きく左右されるため、近年の観光低迷による来島者減少は問題であり、新島における産業振興のためには、観光事業は極めて重要なカギとなる。そんな観光産業が発達し、宿泊施設の多い新島であるが、図13を見てみると、事業の将来性に対して不安を抱いている事業者が多いことが分かる。特に収入300万円未満の事業者では、自然衰退と答えた比率が最も高い。将来性に対する問題としては、「高齢化」が7割を占め最も高く、つづく「後継者不足」も5割と高い割合を占めている。観光客の減少と共に島自体を担う将来の人材不足は大きな問題である。また飲食業・宿泊業よりも高い割合を示し、個別で見たときに最も高い割合を示しているのが建設業で18.8%である。就業者は、災害復旧工事や公共施設整備等、公共事業関連で働く人々が多く、このような公共事業の存在は島民の重要な雇用の場になっている。

以上述べてきた新島村の産業について整理すると、新島村の伝統的地場産業である漁業、農業は、高度成長期以降全体として衰退傾向を辿っている。また、昭和40年代の離島ブームで急成長した観光により、民宿などに代表される第三次産業が占める割合が5割以上という、偏った産業構造が出来上がった。その観光も最盛期に比べ観光客は半減し、低迷状態を続けているが、待っていれば客が来るという離島ブームを経験した事業者たちの危機意識は薄いのが現状としてある。同様に公共の建設事業に依存する度合いも高く、建設業に従事する数が305人(18.8%)と個別に見たときに最も多い。公共投資による開発事業が離島の産業基盤としていまだ重要な位置を占めていることが分かる。離島振興法のもと、他の離島と同様に新島も次々と公共事業を行ってきた結果、島の生活は便利になり、実際必要に迫られた事業であったことからすべての公共事業を批判することはできない。しかし、基礎的な整備は着実に進められていき、今後公共事業がこれまでと同じ規模では続かないことが見え始めている。また、離島から都市などへ若者の流出が続き、今や人口減少に歯止めがかからない。15村の歳入の内8割を依存財源が占め、主な自主財源となっている村税は1割にも満たない現状で、公共投資による外発的な地域振興だけで高齢化や人口流出などの課題を乗り越えることはできるのか。このことは、離島振興法に基づいて行われてきた基盤整備に重点を置いて政策手段が、離島の人口減少、高齢化を防ぐという点では必ずしも有効でなかったことを示していると考えられる。この点に関して佐藤(2007)は、従来 of 自給社会から市場社会に組み込まれたことへの環境変化への意識および流通機構などの社会システムの転換が求められていたが、地域への公共投資がその地域の

15 『広報にいじま 12月号』新島村の財政公表より

産業の近代化に結びつくことなく、投資によって落とされる現金そのものに期待するという体質を生み、事業の内容ではなく、金そのものが問題であり、そのことによって地域の振興になるという錯覚し始めた、と述べている。

このように、国や自治体が行う公共事業と、その後の離島ブームによる外部資本の流入により地域活性化が図られてきた経緯は新島を含む他の離島にも共通することである。今後の離島振興の方向性としても、内発的発展を目指し、島自らの地域戦略が求められる。第4章以降はその地域の自立を目指した新島の内発的な動きを整理していく。

第4章 新島の地域活性化への取り組み

離島の特性を踏まえた上で、新島における観光産業依存、公共事業への依存という現在の地域構造がどのような背景をもとにできあがったか整理した。1970年～80年代中盤にかけての離島ブームは、島の人々の言葉を借りると「待っていれば島に人が流れ込んだ」時代であった。以降、「まったく人が来なくなった氷河期時代」を迎え、観光衰退の問題は現在も続いている。しかし、ここ数年で島の中に流れが生まれてきた「RESTARTの時代」であると話してくれた。地域の自立的な活動により、自分たちの力で発展を目指そうとする活動が動き始めている。特に新島では、地域住民と同様にその担い手として島外からやってきたよそ者たちの存在が際立って見られた。第4章では、本論文の目的である新島の地域活動とよそ者の関係性を明らかにするために、ここ数年で活発となってきた新島の地域活動の事例を取り上げていく。その中でも島内外のアクターが連携しておこなっている「アウトドアウエディング」を中心に据え、そこに関わるアクターたちの全体像を追っていく。【4-1】では、ウエディングの概要とウエディングにおけるアクター間の連携について述べる。アウトドアウエディングの概要把握については「コミュニティウエディングの社会的意義と実施におけるガイドラインの考察(木村 2012)」を参照した。ウエディングを島側とよそ者との協働の形と捉え、【4-2】では、この協働に至るまでの背景を追い、どのような過程を経て島内外のアクター達が集まったのか、島のコミュニティの発展に着目しその関連性を整理する。【4-3】で、島のコミュニティの中でよそ者たちが自分たちをどのように捉えているのかを Nieve という農業活動している Y 氏のヒアリングをもとに、よそ者の役割と効果について考察し、【4-4】では、よそ者の役割とともに彼らは地域の中でどの程度の活動までを担うことができるかよそ者の程度と担う範囲について考察する。

【4-1】新島アウトドアウエディング事業

(1)新島アウトドアウエディングを取り上げる理由

外部アクターであるよそ者と島側の関係性を明らかにするための事例として、「新

島アウトドアウエディング事業」を取り上げたい。ウエディング事業を取り上げる理由として、島内だけではない、島外からのアクターも運営主体として関わっており、地域内外アクターの参加による新しい地域づくりの枠組みを持っていると考えたからである。また、そこに至る背景を追うことで、島内外のアクターたちの関係性の構築のプロセス、よそ者の地域への流入のプロセスを明らかにでき、外と内を繋ぐ中間的存在を分析できると考えたからである。

(2)新島アウトドアウエディングの概要

アウトドアウエディング事業は、2009 年から新島商工会の活動の一環として始まり、コミュニティのつながりや共感を軸に自発的な地域活動の一環として実施されている。現在までに 6 回の結婚式がおこなわれてきた。運営主体は新島ウエディング実行委員会であり、これは明確な枠組みのない任意団体で 10 名前後のメンバーで構成される。組織体制やコアメンバーの編成も毎回異なる。特徴的であるのが、このように固定メンバーによる組織立ったものではなく、多くは新島の人間関係を母体とした自発的な取り組みであるという点である。したがって、ウエディングの発足にあたっては、新郎新婦か発起人がメンバーへ要請するため、発起人・実行委員長などが毎回異なる体制となっている。新島は 15 年以上自給的な結婚式は行われていなかったが、この事業により新しい形で復活したという点で大きな変化であった捉えられる。新島におけるウエディングは 6km にわたり白砂が続く羽伏浦海岸でのセレモニーと既存施設の屋内外を活用したパーティーから構成されることが一般的である。また、第二回目を除いて、すべて人前式として行われている。ウエディング発足に至ったきっかけは、地域活性化を図る新島商工会主導のシナジースキーム事業(平成 20～22 年)におけるケータリング事業に対して、住民からの要請を受けたことである。詳しくは【4-2】で記述する。

(3)アウトドアウエディングの意義

アウトドアウエディングの地域活性化における意義は主に、経済的な波及効果と豊かな地域コミュニティの形成の 2 点が挙げられる。1 点目であるが、島外からの客を一定に集めることができ、大抵島に 1 泊して帰るというスケジュールになるため、観光事業者へ利益が落ちる仕組みにつながり、島全体の経済の活性にも影響するメリットがあることだ。一回のウエディングにあたり、約 100 名の集客が見込め、宿泊費が平均 7,000 円、参加費 10,000 円を基準として考えると、一回で 170 万円の経済効果となる。¹⁶新島商工会の試算によると、一年半で 4 回の実施にあたり、来島者 160 名の増加と推定 700 万円の経済効果が試算された。毎年 500～1,000 人のペースで減少する新島の観光客に対し、このウエディング事業が歯止めをかける可能性も大いに考

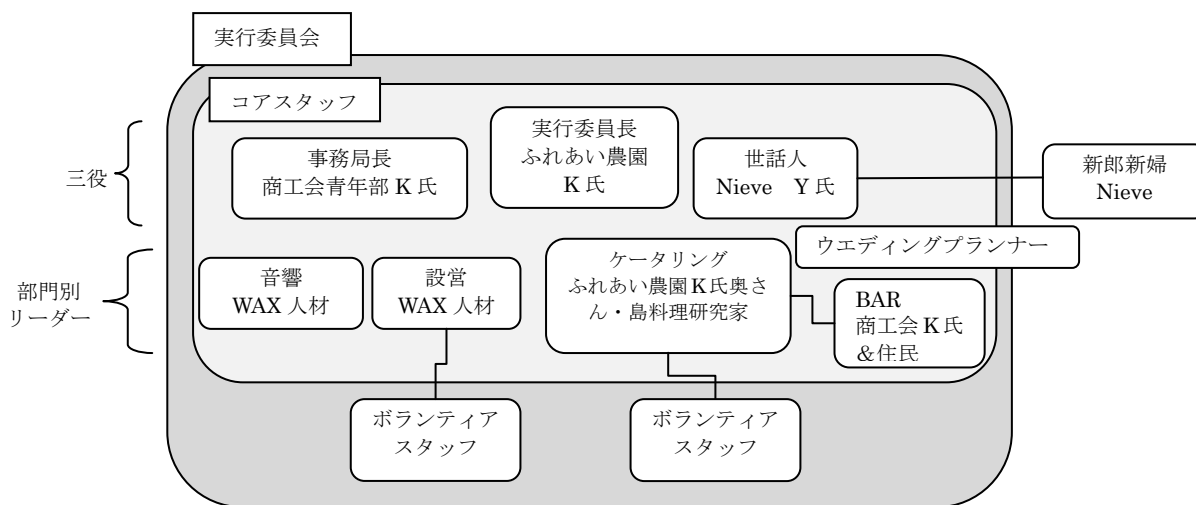
¹⁶ 『平成 22 年度 もやいの絆事業報告書』新島村商工会

えられる。しかし、ウエディング全体の企画料(謝金)以上の額が、観光の受け皿となる宿や会場提供に入る場合が多く、ここで新郎新婦が従来型の収益事業者に対して優先的に予算配分し、実行主体への謝金に関して配慮が不足する場合、ボランティアの多くで成り立つメンバーのモチベーション低下につながるのではないかという懸念もある。コミュニティの力を母体とする事業と予算の兼ね合いは非常に難しい点である。また、ウエディングでは島内在住でウエディングプランナー経験者やバーテンダー経験者など、普段本業として従事していない人でも、副業として能力を発揮する場として、雇用・地域活動参加へのきっかけを創出できる。役割意識を大切にしている点が新島の活動の特徴として挙げられるが、役割に基づく能力発揮の機会がモチベーションの向上にも大きくつながっていると考えられる。

2点目に、地域コミュニティの形成であるが、木村氏(2012)は、コミュニティウエディングを、コミュニティの力を母体として、目的、実施主体、成果において、経済資本ではなく、社会関係資本(ソーシャルキャピタル)を元に行う結婚式と定義し、金銭だけで関係を完結させないコミュニティへの意識が不可欠であると述べている。このようなコミュニティの視点から考えると、①島内外の関係の構築②島内での関係の構築と深化の2点が挙げられる。まず、島内外との関係性であるが、これまで行われてきた6回の結婚式の来島客を合わせると300名以上であり、結婚式を目的とする観光だけでない来島者を集めることができる点で、従来の観光とは異なるアプローチで島の魅力をアピールできる機会となる。また、新郎新婦を介して、実行委員会側(内側)と参加者側(外側)に「新郎新婦のために」という共通の思いから、共感と愛着といった、特別な想いを共有することで一体感が生まれると考える。これは単なる観光では生まれぬ感情を機軸としたものであり、来島者が受ける新島の印象が特別なものとなり、この場限りで終わらない新しい関係性の構築として有意義に働く可能性があると考えられる。地域にある資源を使って地域内外が交流すること自体が将来の資源となるのである。また、島内外の交流のきっかけとなるとともに、島内でのつながりを生み、さらに深める効果もある。前述したように、島民たちの趣味や特技など役割に基づく能力発揮の機会として、地域活動参加へのきっかけの場にもなり、地域内で新たな人的活力の連携を期待できる。また、結婚式というハレ要素の強いイベントにより、自己実現の高まりと高いモチベーション創出につながり、島民を中心とした実行委員会との連携が強化されることが考えられる。ここで取り上げる第5回目のアウトドアウエディングでも、「ウエディング通じて島の人たちがすごくつながった。今までは顔は知っていたけど一緒に同じことを成し遂げることはなかった。」という住民の声があったように、職の違う人同士がひとつの目標に向かってやり遂げることで、内と外だけでなく、内側の中でも新しい交流が生まれるのである。このように金銭を対価としてサービスが完結するのではないウエディング事業では、新島の土台としてある地縁型の結びつきの強いコミュニティを活かすとともに、島外との結びつきにより、

広がりを持たせ発展させることが可能である。

(4)新島アウトドアウエディングの組織体制



17図 14 第5回目ウエディングの実行委員会組織図

ここでは、具体的なアクターの連携をみるために、実際に筆者も参加させてもらった2012年5月に行われた第5回目にウエディング事例を取り挙げる。図14はその時の実行委員会の組織図を表している。参加者80人、来島者60人、スタッフ25人でおこなわれた第5回目のアウトドアウエディングは「農業」をテーマとして、新島と東京の二拠点居住をしながら農業活動をするNieveというチームのメンバーの結婚式であった。実行委員会は、核となる数人のコアスタッフが人間関係を土台としたトップのいない組織を運営している。ウエディング発足の際は、新郎新婦か発起人がメンバーへの申請をするため、実行委員長などが毎回異なる体制となっており、連絡手段としては主にメールリストやSNSを使用している。

このウエディングで実行委員長を務めたのはふれあい農園のK氏である。実行委員長は、事業実施にあたっての対外的責任を負う。長は世話人（発起人）と兼務することが多いが、今回の世話人はNieveの仲間であるY氏が務めた。世話人は、新郎新婦に最も近い発起人として、実行委員会発足のために新郎新婦を共同で他の実行メンバーを誘う役になる。メンバーのモチベーションを高めるための工夫（慰労・要望の調整）など、内部的責任を負う。実施直前になると連絡における内容が雑務的なもの、サプライズに関するものや率直な意見も多くなることから新郎新婦を連絡体制から外すことが多く、その際の連絡役として機能する。彼が新郎新婦とのコンタクトを取りつつ、現場の司会進行をおこなっていた。事務局長は、会議の支援、SNSなどの連絡、情報共有体制の整備、議事録の管理、予算管理などの事務的な作業を中心に務

17 「コミュニティウエディングの社会的意義と実施におけるガイドラインの考察(木村2012)」の新島ウエディングの標準組織体制より作成。

める。第一回目のウエディングから関わるコアスタッフである新島村商工会青年部の K 氏が務め、当日は BAR 担当としても動いていた。BAR、音響、設営の部門別リーダーに関しては毎回同じメンバーが担当することが多い。島外が主体の場合でも現場の受け入れ担当としてはほぼ毎回機能している。音響に関しては後述するがビーチラウンジ WAX の副実行委員長としても活動する T 氏が務めている。音楽イベントで培った技術をウエディングでも活かしており、組織として携わっているわけではなく、個人としてウエディング事業のコアスタッフを担っている。また、設営も同様に WAX で実行委員を務める人がおこなっており、規模の小さい新島ではこのように様々なイベントに参加するアクターが重複している。個人が生かせる役割分担が明確になっていることがどのイベントにおいても活かされているとともに、信頼による仲間意識が強い。ケータリング部門は、リーダーがホールスタッフを取り仕切り、当日最も人数が必要とされる部門である。今回リーダーを務めたふれあいの農園の K 氏の奥さんは管理栄養士であり、シナジースキーム事業の際に雇用されていた人である。今回は「農」をテーマとしたウエディングであり、パーティー会場としてふれあい農園が使用され、Nieve とのつながりから農家の人々から食材の提供がされ、新島の郷土料理研究会の島のお母さんたちによる新島の特産物を使った料理が振舞われるなど数多くの人々が連携したものであった。

以上述べた上位 3 役と部門別リーダーそしてボランティアスタッフによって実行委員会が運営されている。この 5 回目のウエディングは農業を軸におき、Nieve という二拠点居住の交流から生まれたウエディングであったため、島外のカウンターパーとして設営やケータリングチームも設定されていた。商工会の K 氏によると、過去 4 回のウエディングを行うにつれ、今までのスタッフへの依存度が高くなること、広がりや失うことが懸念されていた。そこで、この第 5 回目では、従来スタッフは一步引いて、農業関係者や Nieve を中心とした新しい実施体制を作ることが課題として挙げられていたと話してくれた。それにより、実行委員長と世話人を核とし、従来コアスタッフがアドバイスを行うという組織体制が組み立てられたのである。このように実行主体としてよそ者を活用し、地域側がサポートに回るといった運営は、「地域がよそ者をうまく活用する」といった形が作り上げられていると言える。したがって、今回のウエディングは実行主体として島内とよそ者の両者が関わり、まさに協働の形があったと捉えることができる考えた。

【4-2】ウエディングに至る背景とアクターの関連性

ウエディングの概要について述べ、新島では島側とよそ者との協働による地域活性が図られていることが分かった。では、このような内側と外側の関係性がどのようにつくられていったのだろうか。従来の新しいコミュニティや新しい共同体に向けた取り組みの多くは地域内アクターを対象とするものが多いが、今回の新島の事例のよ

うに、外から来た人々と従来の共同体が協働することによって生まれる活力がある。このような多様なアクターが地域づくりに関わるしくみを総称して地域プラットフォームと呼ぶことがある。これを敷田(2012)は、「複数のアクターが参加し、コミュニケーションや交流することで、相互に影響し合って何らかのものや価値を生み出す場やしくみ」と定義しており、地域内外のアクターの自発的参加による新たな地域づくりの枠組みが必要である指摘している。この考え方を参考にすると、新島で展開されてきた活動は、閉鎖的であった新島の地域がよそ者との関わりの中でより開放的な地域プラットフォームを形成している過程であると捉えることができる。そこで、地域プラットフォームの母体となるコミュニティをムラ型コミュニティと都市型コミュニティに分類し、この二つの軸でウエディング至った背景を整理する。そうすることで、新島におけるアクター間の関係性を地域プラットフォームという大きな枠で捉えなおし、アクター同士の関係性を構築する仕組みについて言及できると考えたからである。

地域プラットフォームの母体となるコミュニティの関係性については、広井(2009)が農村型コミュニティと都市型コミュニティは相互に補完的なものであり、最終的にはその両者(のバランス)が重要であると述べている。従来の日本社会において圧倒的に強かったのが¹⁸農村型コミュニティであり、かつて地域は閉鎖性の強いコミュニティをつくっていた。これは、人と人を結びつけるのは共同体的な一体感であり、そのつながりはある種の情緒的なつながりの感覚をベースに、一定の同質性ということを前提としていた。¹⁹ソーシャル・キャピタルの分類では「結束型(bonding)」ネットワークの特質を持ち、みんなが顔見知りという凝縮度の強い結びつきを持つと同時に、外部に対し潜在的な排他性が伴う。一方、都市型コミュニティは個人の独立性が強く、またそのつながりのあり方は共通の規範やルールに基づくもので、個人間の異質性を前提としている。逆を言えば、ルールや規範に賛同を示せば、誰に対しても開かれているものだと考えられ、異質な者同士を結びつける「橋渡し型(bridging)」ネットワークの特質を持つ。稲葉(2011)によれば、結束型ネットワークは結束を強化する傾向があるが、橋渡し型ネットワークは、情報の伝播や評判の流布において強い外部性を持つとされている。離島ブームで一気に押し寄せた背景にある、島側と外側との関係性は、かつては単なる観光客とその利益の受け手といった利害関係で成り立つ関係でしかなかったと考えられる。それがいかにして現在のような協働体制につくりあげられたのか、ウエディングに至るまでの背景をたどることで新島の地域づくりの背景とアクターたちの関連性を整理する。

¹⁸ 以下、「村型コミュニティ」と表記する。

¹⁹ ソーシャル・キャピタル(社会関係資本)とは人々間の協調的な行動を促す「信頼」「互酬性の規範」「ネットワーク(絆)」を指す。(2011 稲葉)

(1) ムラから都市への歩み寄り

①新島の母体～若者文化・音楽&サーフカルチャー～

第3章の新島の地域特性でも触れたが、もともと新島はサーフィンの島として有名であり、現在も世界各地からサーファーの集まる島である。このようなサーフィンを通じた若者たちが主役となる風土が新島にはもともとあった。その例として、2005年から始まった地域の若者が自主的に運営する「ビーチラウンジ WAX」や2007年に商工会青年部を中心に計画・実施された「Island Riddim Festa」などの音楽イベントがある。

ビーチラウンジ WAX は、新島の和田浜で行われる7～9月の2ヶ月間にわたる音楽イベントであり、2005年から始まったこの活動は今年で8回目を迎えている。普段は何もない美しい白い砂浜に、夏の期間だけ島の若者を中心として木や板でステージや屋台を組み、ライブイベントをおこなう。ドリンクを販売するためのカウンターや、ベンチ、パラソルといったすべての装置が島民によって築かれる。海の家とは異なり、ドリンクの提供と、DJブースが設けられ、期間中は月曜日・火曜日を除き、毎日営業している。通常営業とは別に、サーフィン大会である都知事カップ後の打ち上げの会場として使用され、今年の8月に行われた第6回ウエディングではセレモニー兼2次会のパーティー会場としても使用された。WAXの設立者は島の出身者ではなく、学生時代に新島と縁があり、島を元気にすることがしたいという思いから活動を立ち上げた。「都会と新島がもっと身近なものになれないか」という思いからサーフィンに欠くことのできないものという意味でWAX(サーフボードのすべり止め)と名づけられた。WAXのコンセプトは、①イベントを通して新島を知ってもらう、観光客の増加、島おこし②ビーチラウンジを通して今までと違った新島の夜を体感③島民にとって楽しみを感じてもらえる場となることである。WAXは実行委員長である設立者を除いて、1名の副実行委員長と12名の実行委員で構成され、彼らはすべて新島在住、新島勤務の人々である。実施にあたっては設営の段階からドリンクやDJなど他にも島の若者たちがボランティアとして参加している。彼らはすべてボランティアであり、収入をもらっておらず、活動経費は販売するドリンクの売り上げからのみである。彼らは島の活性・振興のためという意識よりも自らが楽しいから、DJを回す場所が欲しいなど、趣味的な動機も大きく、WAXだけではなく「楽しいから」というモチベーションは新島の地域活動に参加する人々に共通してみられるものである。このように新島には、従来から若者を中心として、共通の嗜好を持つ人々の活動が盛んであり、若者主体の母体があった。このようなテーマ性を有するコミュニティは外部に対して広がりを持つ都市型コミュニティとの親和性も高いと考えられる。

②役割型モデルの形成～住民参加の促進～

WAXとは別の音楽イベントが2007年に実施された「Island Riddim Festa」である。これは当時の商工会青年部部長が開催していたものが大型化し、プロジェクト的に対応する必要が出てきたために、商工会青年部が引き継ぐ形で実施されたものである。また同時期に、商工会では「シナジースキーム事業」という地域活性プロジェクトの計画があり、この二本立てで商工会青年部での活動が行われていった。この音楽イベントとシナジー事業計画の立案・運営に参画した商工会青年部のK氏は、抗火石産業を担う新島物産を一代で築き上げた人の孫である。本土で工学系の研究し、島を出て過ごす生活が長く、ちょうどこの時期に青年部へ加入し、事業推進に参画した。彼は、島の問題解決のために東京での研究開発などを中心にキャリアを蓄積してきた人物である。当時、商工会にはディスプレイ機器がなく、会議をする際にK氏が液晶ディスプレイを会議室に導入したことが当時斬新であった。その場で議事録を取りつつ、パワーポイントで可視化をするといった会議が可能となり、各々の役割が可視化され、情報共有の浸透が図れたなどのメリットがあった。このIsland Riddim Festaの運営とシナジースキーム事業の企画をきっかけに、新島において組織化による事務局的な役割の重要が認識され始める。

シナジースキーム事業は基本構想の理念として「恵まれた自然環境や地域コミュニティを生かした、複数の観光施策を組み合わせることで、それぞれの事業の成果を増加させ、相乗効果を発揮させる」とあり、「効率かつ継続的に経済の振興と地域コミュニティの活性化を実現させる」ことを掲げており、地域住民・地域組織などと連携し、地域資源を活用した相乗効果を期待するものであった。しかし、実際の事務局、会員上層部では住民参加に対してそれほど理解があったわけではなかった。年功序列といった垂直的に閉じた組織は共同体としての一体感は強いが、同時に既得権益と結びつきやすく、排他性を伴うことがある。島自らの地域戦略が社会的には求められていても、実際は補助金に依存した形での現状維持で十分だという考えが多いことも事実だ。このような商工会の意識に対して切り開いていくためにも「住民力」を伴った成果を出す必要があった。また、従来の垂れ流し型の補助金ではなく、企画書を提出したうえで予算を獲得するという商工会にとって初めてに近い形である提案型の事業であり、この点で島に訪れた一つの大きな動きとして位置づけることができる。

その取り組みのうちの一つとして後のウエディングと結びつくこととなるケータリングサービス事業が始まる。ケータリング事業の内容は、①食(昼食・夕食)のセットツアー及び出張給土の実施。その際に、島の地産池消の食材をできるだけ使用し、他との差別化を図る。②古民家(博物館)・海岸(バーベキュー)・温泉施設などへの出張給土の実施。イベントやパーティーなどに出張し、客の要望に応じた料理・食材・道具や人材の提供である。一次・二次生産物を組み合わせることで、地産池消の推進効果や既存の観光体験メニューとして相乗効果を生み出し、資源の活用と新たな客の

誘致を目指していた。事業の計画立案に参画した K 氏は、このケータリング事業を中軸に計画を詰めていったという。その背景には、農業の分野での活動がすでに新島では活発に行われていたことがあり、観光と農業、さらに、新島の産業の一つである新島ガラスによる食器の調達も可能であったことから、3つの分野で連携した取り組みが可能であったことがある。地産地消の推進効果や観光体験メニューとして相乗効果を生み出し、後のウエディング事業へとつながる、来島者の受け入れ態勢の強化と交流を促すきっかけとなった。

モデル事業の実施にあたって拠点となった新島村ふれあい農園は、新島村役場を事業運営主体として、平成9年度にオープンしている。新島村における「農業振興の促進」と「農業後継者の育成、担い手の確保」「都市住民との交流による地域活性化」を図るとともに、島の文化を広く伝えていくことなどを目的に整備されたところである。ここふれあい農園では2004年から「地産地消」と「特産加工品開発の支援」を目標に直売朝市の活動が開始した。毎月第4日曜日の午前中に、旬の地場野菜や地元の原料を使った加工品などが数多く出品され、大変な賑わいをみせていた。この市の開催にあたって農園の職員である K 氏は、島の作物を食べたくても食べられない人と農家を結び付けたいという思いがあったと話してくれた。新島は自給的農家が島の農家全体の9割を占めるため、作物は自分たちが食べるためのものであり、販売するという意識は低い。一つのコミュニティに加わっていると、自然にモノが流れてくると彼は言うように、自分が作ったものを知り合いにあげるといような、物々交換で作物が届いたりすることがよくある。しかし、仕事で島に滞在している教員や公務員などの島民でない人はこの物々交換経済から除外されており、島のものってどこで食べればいいのか分からない状態にあるという。そこで、この両者をマッチングさせることで、島内での交流を深めるとともに、「作ること」から「売ること」へと農家の意識改革を行っていった。現在朝市は農業協同組合（JA）店舗に引き継がれ、農協朝市となり、常設販売へと発展していった。新島の作物を島外に出荷・販売できるシステムも確立していこうとする動きが近年は出ており、そこに外からやってきた Nieve というチームが加わることでさらに新島の農業活動は活発になっていく。

この島内で活発であった農業活動の流れと商工会が連携を図り、新しい地域活動の場が生まれていった。シナジー事業が採択された流れで商工会 K 氏とともに農園の K 氏の管理栄養士である奥さんがケータリング部門のリーダーとして雇用されている。住民力を使わないとプロジェクトが始動できないことが前提となって、企画準備段階からの働きかけと、採択前には事業デモンストレーションを行っており、戦略的に住民参加をこじ開けていった。これらの音楽イベントとシナジー事業の実施にあたり、事務局的な作業の重要性が認識され、個人の役割の明確化とそれに伴った形で商工会青年部を中心とした自主性による活動が広がりを見せ始めた。住民参加を促す際に、すでに活発であった農業系活動と連携した点も大きい。シナジースキーム事業の人材

を地域住民から雇用することで、地域の自発的かつボトムアップ的な活性化を牽引するとともに、島内のコーディネーター的人材に育成することが期待された。

③地域住民参加型～ウエディング事業の発足～

シナジー事業が2年目に入った2009年に、「新島に来島し、仲良くなった友人のために結婚式をあげたい」という声が島民バンドのメンバーであり、WAX 実行委員でもあるT氏から挙がり、ケータリング事業に取り組んでいた商工会のK氏のもとへ食事サービスや行き届かない部分への公的なサポート要請が入った。これまでの商工会の取り組みの中で培われていった事務的な役割モデルの意識や、シナジースキーム事業における住民参加の促進などを背景として、島民を中心とした実行委員会との連携が取れ、第一回アウトドアウエディングが発足に至った。しかし、ウエディング事業も当初は商工会で受け入れられなかった。ウエディングの声が上がった際に、島の音楽系若者たちの間でのドラッグの問題やそこからトラブルが起こるだろうという懸念から、商工会からの承認が得られなかった。そこで発案者であるT氏が念書を書くまでいって、二度にわたって説得を行うことで事業の承認を得られると言う経緯がある。このように島内では、従来の年功序列性の強い組織と、次第に主体性が生まれてきた住民の間には意識の大きなギャップが存在しており、このギャップに対応していく必要があった。組織になった時の村の閉じたネットワークをいかに開くことができるかという課題に対して、働きかける少数のキーパーソンの存在があったことがうかがえる。地域から声が上がリ、地域から開かれていったという点で、一部での自発的活動が育まれていることが分かる。

ウエディングでは音楽イベントなどで培われた会場設営や音響のセッティングなどを得意とするWAXの人材がウエディング事業にも参画することにより、会場設営や流木アートなどに活かされている。他にも、コアスタッフの身内にウエディングプランナーがいたり、移住者の中にバーテンダー経験者がいたりなど、島内の雇用だけで考えては得られないようなメンバーも参画していく。このように、島で本業として従事していない場合でも、副業として参加できる地域活動参加の場となっており、ウエディングを中心に様々な方面からの人的活力が得られた。新島のような小さなコミュニティにおいて、島内でおこなわれているイベントに参加するメンバーは重複している。組織だった活動ではなく、個々が役割を担って活動しており、このような個々の活動が結び付きあって、アウトドアウエディングのような多様なアクターが関わる事業が立ち上がったのである。そして、都市型的な役割人材の重要性に気づくとともに、そのような多様な人材が島にいることに自分たち自身も気づき始める。このような役割意識が重要視された点が、モチベーションの向上にも大きくつながっていると考える。この時点で島内における最低限の主要な地域活動のプレーヤーをつくることができたと言えるだろう。以上のように島内では、プロジェクト型にまで大きくなっ

た事業において、従来の村型社会の慣習から役割人材の重要性が迫られ、都市型コミュニティへの歩み寄りが見られた。

・島内における地域参加へのステップ

以上の流れをおさえると島の中には村型コミュニティと都市型コミュニティの対立軸があることが分かる。この両者の間を取り持つコーディネーター的人材の経緯を中心に地域参加へ流れを整理すると以下の流れになる。

STEP1 役割型人材の需要発生

商工会において、島の転機となる2つの大きなイベントが行われた。一つ目は、シナジースキーム事業という地域活性化を目指したものであったが、実際には住民参加をあまり歓迎しない垂直に閉じた商工会での取り組みであった。二つ目に **Island Riddim Festa** という音楽イベントで、規模が大きくなりプロジェクト的に対応する必要が出てきたために、商工会青年部が引き継いだものである。どちらも島にとっては初めてに近い形でのプロジェクト型のイベントであり、このような切迫した状況の中で問題解決力や役割型の運営などの重要性が強調され、都市的なスキルを持ち得た商工会の K 氏が参戦することとなった。

STEP2 役割型人材のモデル形成

K 氏の参戦により、議事録を取り、パワーポイントで内容を可視化するという会議、それによる役割分担の可視化など、今までになかった都市型のスキルを持ち込んだ運営が行われた。都市型人材の引き込みに成功したシナジースキーム事業と **Island Riddim Festa** 運営企画をきっかけに、新島において組織化による事務局的な役割の重要が認識され始める。そして、シナジー事業が採択された流れで商工会 K 氏とともに農園の K 氏の管理栄養士である奥さんがケータリング部門のリーダーとして雇用され、住民力を使わないとプロジェクトが始動できないことが前提となって、戦略的に住民参加を促した。これらの事業の実施にあたり、事務局的な作業の重要性が認識され、個人の役割の明確化とそれに伴った形で商工会青年部を中心とした自主性による活動が広がりを見せ始めた。一方で、これまでの切迫した状況が一旦落ち着いてしまうと、都市型人材は従来の考え方とは異なる厄介な存在に変わり、従来のムラ型の組織の間での軋轢は存在したままであった。K 氏のような都会型は役割型人材であるために、自己肯定のために非常事態を求めやすい。「自分が重宝されたのはいずれの状況も”非常事態”であり、問題解決能力が必要とされたから」と自身も述べており、自分の理想と実際の周囲の無理解の中で、島の中での自らのポジショニングに苦勞していた。

STEP3 コーディネーター的人材のモデル形成

シナジースキーム事業の人材を地域住民から雇用することで、地域の自発的かつボトムアップ的な活性化を牽引するとともに、島内のコーディネーター的人材に育成することが期待された。ふれあい農園の K 氏の場合、役場という立場からの農業支援の仕事、商工会との連携による地域活動、そして農家の人々との関わりの中での住民からの信頼(共感)を得ることで活動の幅を広げてきた。また商工会の K 氏は、シナジースキーム事業においては住民参加や役割型人材の活用の重要性を説きつつ、Island Riddim Festa では若者との交流により、役割型人材だけでなく、共感を軸とする接点を広げることができた。この過程で役割型人材が島内における村と都市の二層構造のギャップに対応していくコーディネーター的人材として活動していくこととなる。また、彼の地域活性に対する戦略や情熱が先行してしまう際には、「それじゃみんなついてこないよ」と助言してくれる島民バンドのメンバーであり、WAX 実行委員でもある T 氏の存在があった。島内でも都市的な役割人材型の K 氏の場合、島の若者たちを中心とする結合型 SC に働きかける際に、同級生である T 氏の存在が仲介し、若者を中心とするグループと共感を軸とした連携がとられていくこととなる。その過程で T 氏からウエディングの声が上がり、ケータリング事業に取り組んでいた K 氏のもとへ依頼が入った。T 氏が「同級生だからウエディングを頼めた。だからなんとかなった。」「WAX の運営も、同級生だからぎっくばらんに話せるし、凄い事をやってくれてるのが分かってるんだけど、怖がらずお願いできる」と言うように、単なる役割型だけでなく基盤としてある結束の強い人間関係が大きく働いていることが分かる。

STEP4 住民参加へ

ウエディング事業では会場設営や運営に関して島内の雇用だけで考えては得られないような様々な方面からの人的活力が得られた。島で本業として従事していない場合でも、副業として参加できるような地域活動参加の場が形成され、第二段の住民参加が促された。島内では都市的な役割人材の重要性に気づくとともに、そのような人材たちが島にいることに気付き始める。ウエディングが始動したこの時期のメンバーが「K は頭を、俺たちは身体を使うでも心は一緒でしょ。」と言うような場面があり、共感を核として、従来からの結合型 SC に都市的な役割型意識が高度に見いだされたことを象徴している。島内において、濃密な人間関係を基盤とする村社会的な行動と都市的な役割が融合したといえる。都市的人材が島内で役割を果たそうとするほど、疎まれる部分があったシナジーの活動の中で、このような想いが広がり相互理解が育まれた。都市型人材として活動する中でも、こうした相互理解からムラ型を尊重する気持ちも芽生え、K 氏自身も単純な都市型人材からハイブリット型へと変わった

という。非常事態という島に訪れた役割需要から都市型人材が参画し、村型のコミュニティを通して限られた人材が間口を広げていく形で地域活動が進んでいった。

(2) 都市からムラへの歩み寄り

・ 島外との交流型～島外との交流の活発化～

島内で個々の人材や活動が結びつき活発化していくことと平行して、島外との交流も生まれてくる。ウエディング事業発足の直前に、カフェと宿泊施設の両方の機能を備える「Café&宿 saro」がオープンしていた。この店は、東京 R 不動産の H 氏がオーナーであり、WAX をきっかけに新島に魅了され、新島で何かをしたいという思いのもと会社のプロジェクトの一つとして実施に至った。saro は初期のウエディングにおいて連携した動きをとっており、会議や打ち上げの場所など交流拠点としての役割を担っていく。またこの saro のオーナーによる本土でのプレゼンテーションをきっかけとして Nieve という農業のブランド化を行うチームがやってくることとなる。

Nieve は、平日は東京で働き、週末に新島に来て、農業に取り組むという二拠点居住を実践している。メンバー7、8人で活動しており、彼らは世田谷ものづくり学校(IID)で学ぶ仲間同士であった。卒業制作で何かをやろうと話していたところ、授業の一環で訪れた新島に強く惹かれプロジェクトを行うことになった。カフェでもやろうかという何かやりたいという漠然とした思いから活動を開始したが、土地を探すことに苦労した。島では「土地はご先祖からの預かりもの」という意識が非常に強く、土地を手放す人がいないためである。空き家がない訳ではないが、夏には親戚が戻ってくるからと他人に貸すことは少なく、土地を入手するのに5年もかかった人がいるくらいである。彼らもまた家が見つからなかったが、代わりに余っている畑を借りることができた。農協にプレゼンテーションをおこない、約半年かかって畑を貸してもらえたという。「とりあえずやってみろ、という感じで貸してもらえた。どうせ農業やりたいという若者で、来なくなるだろうと思われていたと思う。」と話してくれた。2009年11月から始まった彼らの活動は、ふれあい農園を中心とした農業活動とも結びついていき、島外への出荷・販売をするために住民と一緒にアイデアを出し合い、アシタバやたまねぎなどのブランディングに取り組んでいる。たまねぎのパッケージのロゴをデザインし、2010年の春から都内のスーパーに出荷している。島らっきょうやアメリカ芋のブランド化も行われ、都内の青山で開催されているファーマーズマーケットでの販売活動や、紀伊国屋、三浦屋といった高級スーパーでも販売活動を行い、積極的に島の資源を外へ持っていく活動に取り組んでいる。

このように地域活動における創造的な活動に従事する新しい働き方や新たなライフスタイルとして島に魅力を感じた都市側からの歩み寄りがあった。ソーシャルデザインの分野に近い彼らの活動は、地域と共にあるとする共創の意識や主体性が高く、「仲間」として島に受け入れられ、よそ者ならではの役割を発揮している。彼らは島内だけでは限界のある高い情報発信力を持ち、活動に広がりを見せることができる。

彼らと同じく IID の卒業生が離島経済新聞というネット新聞を立ち上げ、そこを媒体として島外への発信力も高まった。さらに、BS フジ「Table of Dreams～夢の食卓～」という番組にも彼らの二拠点居住の取り組みが取り上げられ、新島の取り組みに注目度が上がっている。

(3) ムラと都市の結びつき

・ 島内外協働型～島内外での連携の活発化～

筆者が実際に参加した第 5 回目のウェディングの新郎新婦は、この Nieve のメンバーであり、企画運営には島の農業生産者や Nieve、これまでの実行委員会スタッフが連携した実施となり、企画運営の段階から、島内外の連携が行われたという点で大きい発展がみられた。また過去 4 回のウェディングを行うにつれ、今までの実行委員会への依存度が高くなること、広がりやを失うという懸念から従来のスタッフは裏方へまわり、Nieve や農業関係者を中心とした新しい実施主体を構成した。運営の段階からよそ者と共に創り上げたように、島の戦略とそこに想いを重ねるよそ者との協働の相互連携は、ムラと都市が結びついた新たなコミュニティであり、その象徴且つ具体的活動がアウトウェディングであると言える。

地域戦略は島内の意識としては求められておらず、地域戦略の必要性を感じていたのは一部の住民にすぎなかった。特に島内外の若者が交流して作り上げる関係性が活発になっている現状であり、若者を中心としているのは従来からある音楽を通じた人とのつながりや、同級生といった水平的なつながりを持ち、楽しさやおもしろさを共有することでつながれる寛容性と、新しい時代をつくろうとする意欲が高い層であるからだと考えられる。ウェディングが、地域活動参加へのきっかけの場にもなり、地域活動への参加度合が高まることで、複数の活動主体が連動し、相互の情報交換・共有などを通じて、徐々に個別の活動を越えた連携体制が現れてきた。その段階で、よそ者もつ知識やノウハウが蓄積され、地域振興にむけた知識創造や新たな活動の広がりが期待できる。それによって起こるアクター達のエンパワーメントが地域振興に結びつき、さらにフィードバックされることで、再び新たなアクターのつながりや関係の深化、それに伴う活動への展開へと良い循環が行われていくと考えられる。

以上の流れを整理したものが図 15 と図 16 である。図 15 はアクター間の関係性構築の過程を分かりやすく図示したものであり、商工会 K 氏のノートを参考に作成した。図 16 は新島の地域活動におけるアクター間の関係性を表し、重要だと思われる変化のポイントを押さえながら流れを整理したものである。敷田・森重(2007)の交流活動の戦略的プロセスを参考に作図した。

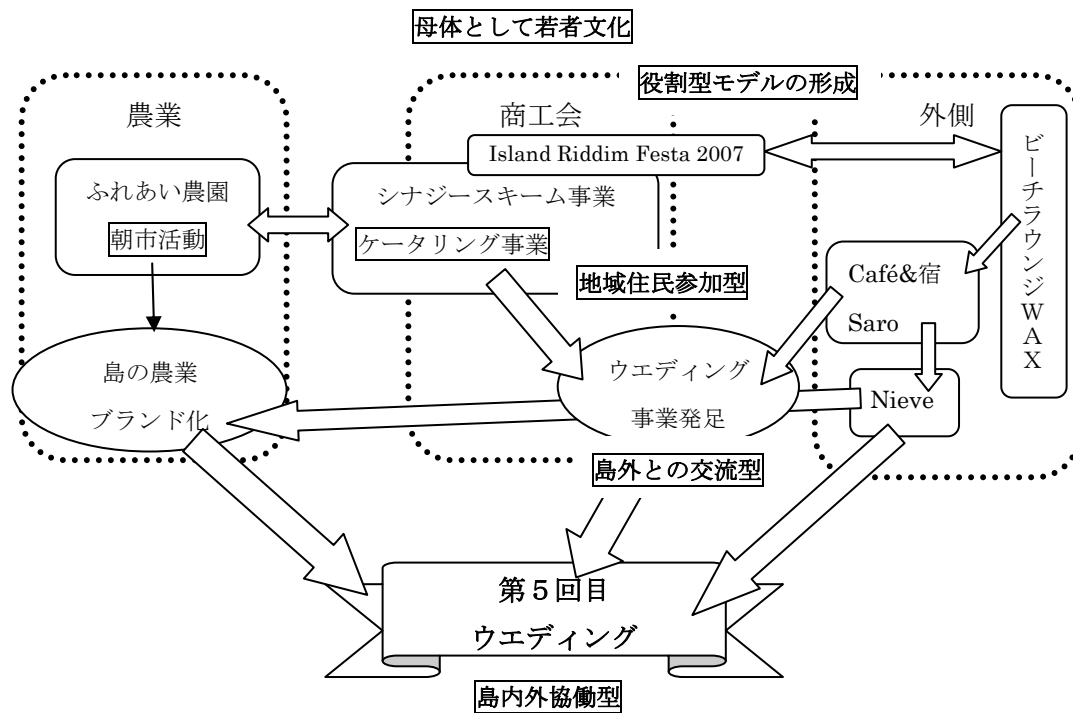


図 15 ウエディングに至る背景とアクター間の関連性

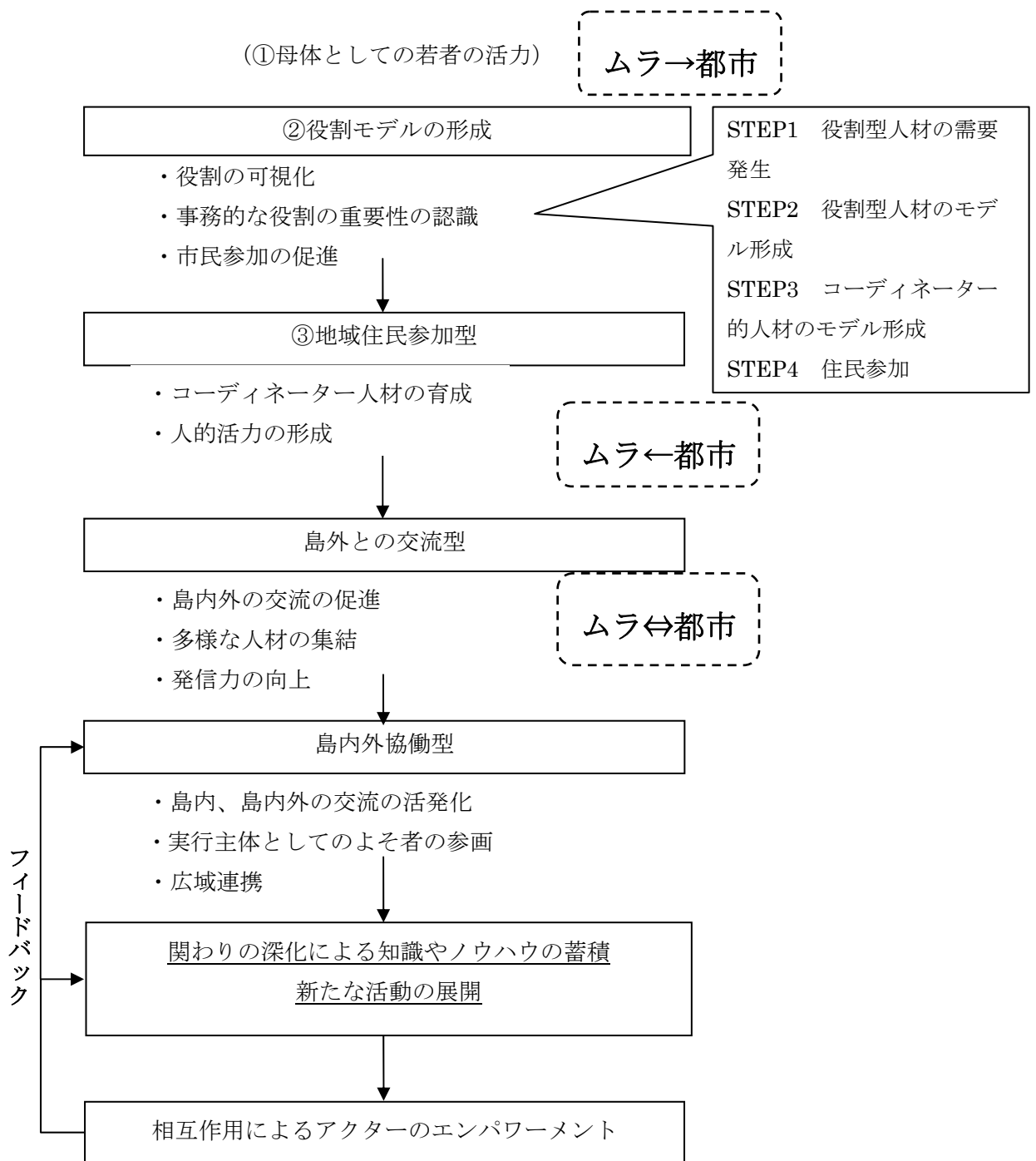


図 16 アクター間関係性の変化の流れ（番号は文章に対応）

【4-3】よそ者の役割

新島の活動において、よそ者たちがやってきたことで大きな動きを生んでいることはウエディングに至る背景からも明らかである。では、島内外の関係性の中で、よそ者たちは地域における自らの役割をどのように捉えているのだろうか。第一章でも述

べたように、地域側の気づかない視点でその地域の良さを発見することが期待される。また、よそ者による効果は敷田によって5つに分類されている通りであり、これらの効果は新島でも同様に期待される。ここでは Nieve のメンバーとして活動する Y 氏へのヒアリングをおこなうことでより具体的に新島におけるよそ者の役割を明確にした。

①情報発信力

まず、インターネットを使った情報発信の面で高い技術があり、外部への発信力を強く持っている点が挙げられる。Nieve には、制作や撮影のスキルがあるメンバーもいるため、島の人たちだけではなかなか難しかった新島の野菜のパッケージデザインやパンフレットの制作など洗練されたデザインのもので作れるという強みがある。彼らは都内において販売活動をおこない、今まではごく限られていた出荷先を開拓し、これまでになかった広がりを見せた。二拠点居住をする彼らには、地域を出て発信する力がある。さらに、野菜が売られていく様子を映像に収め、島に持ち帰り農家の人々に見せたところ、自分たちの作物でこんなに喜んでくれる人がいるのだと農家の人々の意識が変わったという。自分たちが作ったものがどう評価されるかという点は、生産者はとても気になる場所であり、顔の見える関係は消費者だけでなく生産者も求めている。その間に Nieve が入ることで、両者をつなぐという働きもしている。ふれあい農園の K 氏は、彼らが島に来たことが良い「刺激」になっていると表現し、島に小さな変化が起き始めていると言う。

彼らは島の人を本当に元気になってくれていますね。島では当たり前の食べ物や習慣でも、新鮮な驚きをもって楽しんでくれるし、野菜のブランド化にしても今まで気づかなかった島の良さを発見してくれる。

島の人たちも以前より自分たちの作るものに価値があるんだなと自信を持てるようになってきました。(greenz HP 記事 2012/4/17 より抜粋)

Nieve の活動を見て「なんかおもしろそうだな」と言って島の人が畑を始めた、共に活動をする中で、農家の方が「30年ぶりにわくわくしている」と話してくれたというエピソードもあり、彼らの活動が新島を変えつつあることが分かる。つまり、よそ者には外側への情報発信と同様に、地域側への情報発信の役割も担っている。まさに地域に気付きをもたらす存在であり、知識の移転から地域が変容していくきっかけになると考えられる。

②地域の潤滑油(地域をつなげる)

人口およそ2,600人の新島のような小さいコミュニティでは、地縁・血縁に基づい

た年功序列の関係が少なからず存在する。新島の農家のグループにおいても、年功序列による発言力と決定権の強さが決まっていた。その中で Nieve は農家同士の間立ってしがらみのない立場からの調整役ができる。「島の人では言いにくいことがあっても自分たち経由で伝えることができる。違う視点を持っていることに自分たちの価値がある。」と彼が述べるように組織から一定の距離を置いているメンバーだからこそ新しい提案ができると同時に、地域の間関係の調整をすることができる。これにより、当初に比べ、農家の人々の間での発言が活発になったという。売り上げなどの目先のもの考えるのではなく、もっと先を(ブランド化)を考えるようになった。現在明日葉を使ったレシピを作成中であり、これらの活動は農家側から声が上がったという話だ。また、「自分たちが一番若いからこそ向こうも発言しやすい場ができた。」という話も出てきたように、平均年齢 30 歳の若者を中心とするメンバーであることから年上の農家が気軽に発言できる雰囲気があったと思われる。このように、よそ者には地域内の円滑なコミュニケーションを生み、さらに地域内の人と人をつなげる地域の潤滑油としての役割があると考えられる。

③新たなよそ者を呼び寄せる

以上の 2 点はヒアリングにより挙げられたよそ者の役割であるが、もう一つ調査を通じてよそ者の役割が浮かび上がった。第 4 章で新島のアクター間関係性を時系列追ったことから、saro と Nieve の外部アクター達は、WAX から saro へ、saro から Nieve へとよそ者のつながりが新たな外部アクターを呼び寄せたことが分かる。①とも関連するが、発信力の高い彼らはブログや SNS での活動報告や日頃の島生活を発信し、興味のある人々を惹き付ける。地域外からの仲間を呼び寄せ、新しく人的活力を呼び込むことによって新たな活動に展開する可能性がある。このようによそ者は地域に新たな仲間を呼び寄せる地域外のネットワークを持っている。

【4-4】よそ者が担える範囲

よそ者の役割とともに彼らは地域の中でどの程度の活動までを担うことができるのだろうか。以下の表 2 はよそ者の程度と担う範囲を軸に整理したものである。祭りに関しては、意図、組織構成、運営方法などによっていくつかの立ち位置が考えられるが、地域コミュニティを母体とする土着的で閉じている場合とテーマ型、役割型で開かれている場合の大きく 2 種類に区別することができるだろう。また、よそ者にしても「よそ者」「地域内よそ者」「離島者」の大きくこの 3 つに分けることができるが、さらに交流レベルによってよそ者は(交流コアレベル>交流人口>観光客)に分けることができる。本稿では観光客は地域の仕組みや利害関係に与える影響力が少ないと判断しこれには含んでいない。また、地域内よそものについても島に血縁がいる

かどうかでコミュニティにおける立ち位置が大きく変わってくると判断し、(Uターナー/Iターナー者)で区別した。

祭り	よそ者		地域内よそ者		離島者(島出身者)
	交流コア	交流	Iターナー	Uターナー	
土着型	×	×	△	○	○
テーマ型(趣味型)	○	△	○	○	○
役割型	△	×	△	△	×

表2 よそ者が担える範囲

よそ者の中でも地域活動に深く関わりを持ち交流関係が深い場合、地域の祭りといった地縁コミュニティに基づく祭りでは、地域に血縁を持たない彼らが担うことは難しいと考える。これは土着型の祭りが地域のつながりや豊かさを再確認するためのものであるためである。一方で音楽イベントやスポーツ大会といったテーマによる祭りの場合、趣味や興味といった共感に近い形での参加が可能であり、土着型に比べ外に開かれている。役割型の祭りという、本稿で挙げたウエディングのようにテーマに対する共感を持ちつつも、自ら何らかの役割を担って参加するものである。これは外に開かれているとも捉えることができるが、その場にふさわしい人間であるかという点において、ある種の“資格”のようなものが必要であると考えられ、誰に対しても開かれているわけではない。したがって、役割型に関して担える者はその個人の能力や資質により、内容が異なってくると考えられる。

Iターナー者は、自治会に入っているかどうか、その地域で所帯を持っているかどうかなど、地縁・血縁のコミュニティの関わりの中で、その立ち位置により土着型の祭りへの参加の仕方も異なる。一方でUターナー者はもともとの血縁により、土着型へはすんなりとして入っていけるだろう。ただし島出身であるがすでに島を離れてしまっている者たちは、地域にいない以上役割型を担うことはできない。

このようによそ者の程度の違いによって担える範囲が変わってくることが分かる。具体例としてNieveを挙げ、彼らは何を担えているのかを考えてみると、まず彼らは、村民運動会や島内祭りといった行政や自治会といった地縁コミュニティを基盤とした土着的な祭りには主体として参加することはできない。一方で、島内の一大イベントである新島村民駅伝では、小中高・消防団など島内のチームとともに特別枠で出場が認められており、参加することができる。これは実行委員会によるテーマ型の祭りであると考えられ、島内に限定される結束型SCを重視しながらも、ある程度外に開かれた橋渡し型も含んでいると言える。島内祭りから発展させた土着性はあるながらもテーマ型として多少間口を広げているものと捉えることができる。また、彼らは2009年から開催されている芋フェスタという新島村のサツマイモ振興をすす

める農業関係のイベントにも参加している。2012年に『新島の農×デザイン』というテーマでワークショップが開催されており、進行役などを担っていた。農業というテーマのもと彼らの参加が可能となった点も考えられるが、ファシリテーターとしての役割を担い、その場においても不自然ではない存在として農家の人々からの共感(理解)があったと考えられる。

よそ者がどのようにして地域に参加するかは、よそ者に対してどのように地域が開かれているかによって異なってくる。地域の開き方も同様にテーマ型や役割型によって異なってくると考えられるが、どちらにおいても前提として考えられることは、興味・共感をベースとした意思疎通が図れるかという点であり、特に村社会の中では共同体としての一体感を重視するために信頼できる相手かどうかという基準は重要であろう。そこから役割型へ進む段階では、自らの想いととも周囲からの信頼や理解も必要となり、その点で外との結節点を担う地域のコーディネーター的人材が、正しく共感で島に入るかどうかを事前に観察していると考えられる。

以上のように、よそ者の種類によって活動を担う程度にばらつきがあり、地域においてグラデーションがある。しかし、どのよそ者に対しても基本的にテーマ型は開かれており、地域内への結節点として捉えることができる。ここを入り口とし、共通のマインドを持ったとき、よそ者は地域の中で認められ信頼され、よそ者としての役割を担ってくる。そして地域側は、よそ者の声に耳を傾け、よそ者が地域に意思表示できる場を創ることが必要であろう。このような共感を始まりとするプロセスから地域とよそ者が互いに協力し合う関係性が築け、よそ者との創造的な関係は地域を豊かにすると考えられる。

第5章 開かれた地域コミュニティへ

新島では村側と都市側の双方からの歩み寄りにより、島内と島外も含めた多様なアクターたちがネットワークを形成し、地域プラットフォームを構築している。そして、新島で展開されてきた活動は、閉鎖的であった新島の地域がよそ者との関わりの中でより開放的な地域プラットフォームを形成している過程であると捉えることができる。最後の章では、新島におけるアクター間の関係性を改めて地域プラットフォームという大きな枠で捉えなおし、その空間的把握的把握を行う。【5-1】では、本論文の目的であるこの島側とよそ者たちをつなぐ仕組みとして観察された中間的存在を明らかにし、考察を行う。【5-2】では、新島で展開されてきた島内外アクターによる地域活動を、もともと島という閉鎖的なコミュニティが、よそ者との交流をきっかけより開放的でフラットなコミュニティへと変容していった過程と捉え、新島における地域プラットフォームの枠組みを示す。そして、【5-3】では実際に活動するアクターたちのモチベーションについて述べ、論文のまとめとする。

【5-1】島の内と外をつなぐしくみ

よそ者と島側が協働するためにはその過程で両者間のコミュニケーションが不可欠である。特に、離島という閉じたコミュニティにおいては、海の向こうからやってくるよそ者に対して少なからず何者であるかという不審な目や不安は存在すると考えられる。また、地域活性とは名ばかりの外部からの一方的な押し付けによる地域づくりの失敗の事例もある。異質な存在であるよそ者を地域側が受け入れるまでにコミュニケーションはどのように行われたのか。新島では、このような両者の間を取り持ち、相互のコミュニケーションを円滑にさせる中間的存在として①キーパーソン②交流する場・空間の存在が観察された。

(1)人を通じたコミュニケーション ―キーパーソンの存在―

島内外のコミュニケーションに関して、キーパーソンの存在が相互コミュニケーションを円滑にし、両者をつなぐ橋渡しの役割を担っていたことが分かった。例えば新島村商工会青年部の K 氏やふれあい農園の K 氏がそうである。商工会の K 氏は、初期の音楽イベントやシナジー事業計画の立案・運営に参画しており、ケータリング事業にとまなうふれあい農園への働きかけや、ウエディング事業に際しては事務局長など歴任している。式を挙げたいという新郎新婦の要望も彼が受け皿となり、実施に至る。後述する商工会が実施している島談義においてはコーディネーター役を務め、交流の場づくりも手掛けている。筆者自身、彼を介して第 5 回目のウエディングスタッフとして見学させてもらい、また島談義にも声をかけてもらい参加することができた。このように地域内だけではなく、外側も含めた多様な人材の関係性を構築している地域コーディネーター的存在であるといえるだろう。また、ふれあい農園の K 氏も同様に、人的交流の活力を生み出すきっかけづくりをおこなっている。朝市のはじまりも、島民ではない人と農家をつなげたいという想いがきっかけであり、農業の活性化へのコーディネーター的存在として挙げられる。Nieve の活動の中でも、農業技術の助言を行うなどアドバイザー的な役割も担っている。以下は、彼のコメントを引用している。

『新島は流人の島なんですけど、流人は、この島で大きな役割を担っていたんです。異文化を島に持ち込むので、島にいながらにして異文化交流するんですよ。場合によっては技術の伝道者だったりしてね。そうすると、もともと島に住んでいる人たちは、少なからず影響を受けて、何らかの化学反応が起きる。そこから新しい価値が生まれてきたりするんです。だから、外から来た人には、積極的に動いてもらいたいですよね。』（『離島経済新聞』2010.11.20 島と暮らしと農業と新島ふれあい農園）

このように、よそ者の活動に対し寛容であり、支援しようとする意志がある。彼の

ような存在がよそ者の活動を支援する地域の受け皿となり、よそ者の地域への参加度を高めていったと考えられる。

また、彼らはそれぞれの立場で活動するプレーヤーでもありながら、地域内外をつなぐ橋渡し役であることが分かる。そこに共通する点として、彼らは地域内にいながらよそ者と同じような「異質な他者としての視点」を持っているということが挙げられる。商工会の K 氏は、血縁は新島であるが、生まれは東京であり、本土暮らしが長く、本土では工学研究者としての職も持ち、新島での商工会活動や会社務めなど現在も新島と本土を行ったり来たりという生活を送る。ふれあい農園の K 氏も 12 年前に新島に来た移住者である。新島のことをよく知ると同時に客観的にみる視点と、外部ネットワークも持っている。敷田 (2005) は地域にいながらよそ者と同じような視点も持てる存在を、「地域内よそ者」と表現しており、彼らは何らかの学習経験や経験を通して、地域が持つしがらみや常識を乗り越えていき、地域変容を生み出す可能性がある」と述べている。また、隠岐中ノ島の海士町の山内道雄町長は、島外で働いていた自らを「半よそ者」という言葉で表現し、よそ者の目を持った人々の活用を積極的に行ってきた。地域の人的ネットワークを持つと同時に、よそ者の役割も担っている彼らは、内側と外側の接点としてよそ者たちを引き寄せ、交流をもとにして協働による地域づくりを進めていくキーパーソンであると考えられる。

前章で、よそ者の役割について「新たなよそ者を呼び寄せる」と述べたが、よそ者である彼らが地域に深く関わる中でコミュニティの一員として認識されたとき、彼らは新たな地域のコーディネーター的な存在として機能する可能性がある」と考える。つまり、地域での信頼やネットワークを持ちながら外部とのかかわり持つことで、彼らを介して新たなよそ者を地域に呼び込み、自らは両者をつなぐ役割を担うということである。筆者が参加した地域内外のアクターたちが集まった島談義の中で、「よそ者である彼らの方が自分よりも島民らしい」といった発言があったことから、よそ者であっても地域の視点は持つことができるし、同様にまた、地域住民であってもよそ者の視点は持つことができる」と考える。このような相互に作用しあい、地域が変容していくことこそ地域活性につながるきっかけとなるのだと考え、このような住民間のネットワークを起動させるキーパーソンの存在があった。

(2) 場・空間を通じたコミュニケーション―「saro」「島談義」―

黒田(2006)は、バラバラに自立し拡散する個人と建築、都市との間をつなぎ止めるための空間装置「共有空間」「中間領域」の必要性を述べている。また、近い視点で、広井(2009)は、コミュニティの中心の歴史的変遷を捉え、見知らぬ人々が気軽に訪れ、そこでコミュニケーションが生まれるような拠点的な場所は重要であると述べる。両者の議論は、都市におけるコミュニケーションの喪失を取り戻すための交流の場としての捉え方をしているが、見知らぬもの同士の空間共有という点で、よそ者と地域側

との関係性においても同様のことが言える。新島では、この交流の場として、「Café & 宿 saro」と「島談義」の2つの存在があったと捉えることができる。

saro は、2009年8月に開業したカフェ兼民宿である。ちょうどウエディング事業が発足する直前に開業し、活動する人々の会議場所、交流する場として機能し、アクター間の連携の活発化につながっていった。島談義の会場としても利用され、今年行われた第6回目のウエディングではパーティー会場になるなど島内外の交流の場として幅広く活用されている。例えば、観光客であっても島の人々との交流に期待する場合、交流の窓口として宿はハードルが低い。誰でもいつでも関わることができ、今回は対象としていない観光客に対しても開かれている空間である。NieveのメンバーであるY氏は、冬の新島にひとり隔週で通い、saroに通っているうちにそれを見ていた人達が応援してくれるようになったという。仲間が増え親睦も深まっていき、新島入り込んでいく中で、saroの存在は大きかったと話してくれた。敷田(2005)は、宿は地域の中にありながら、「旅の者」を泊める場所であり、ある意味で羽目を外せる「非日常空間」であると述べている。地域外に開かれている場所として、よそ者が自由に意見を述べ、それに対して地域側が受けとめるというような開放的な空間として捉えることができる。このようにsaroの存在が、島と接点を持つ最初の入り口となり、また島民との交流拠点にもなり得たと考える。

同様に、新島村商工会村おこし実行委員会が主催する「島談義」も交流の場になっている。「島を感じる、島を語る」交流会として、場所、メンバー、内容もその時に必要であると思われる場の設定をしておき、定期的で開催されるものではない。単に交流の場を構えるというよりも、戦略的な開催を試みている。各々の島で活動する人々の活動報告会や、講師を呼んで行う勉強会、島の将来について語り合う交流会など毎回内容も参加メンバーも異なる形で、島をまたいだ人的交流が行われる。地域住民だけに限定される活動ではなく、Facebookやtwitterを使った参加を広く呼びかけ、誰でも参加することができる。島への関心が高い人や、人的ネットワークがある人など、SNSを使った感度の高い人に必然と参加者は限定されてくるため、宿に比べるとハードルは少々高くなるが、新しい活動へのきっかけや、人的ネットワークの広がりという点では大きな成果につながると考えられる。このような、地域の内側にも外側にも開かれた「場」をうまく活用した地域課題の解決のしくみが新島では見られた。

以上の2つの要素が、新島における地域内外の多様なメンバーによるコミュニケーションや交流を生み出している。そこから個々が主体の新たなつながりを創出し、新しい活動を生み出す機会をつくり出していた。上記で挙げた中間的存在であるふれあい農園K氏、商工会K氏、saroを、経歴(UIターン・島出身など)、立ち位置(島内・島外など)、ベクトルの組み合わせで表にまとめると以下のようなになる。ベクトルに関しては、働きかけの方向が島内なのか島外なのかを分け、さらに、よそ者の役割として挙げた「情報発信」と、「地域をつなげる」「新たなよそ者を呼び寄せる」

をまとめた「ネットワークの形成」の2つ要素を用いそこにおける比重を◎や○で表記した。

			ふれあい農園 K 氏	商工会 K 氏	saro
履歴			I ターン (移住者)	U ターン (島の人)	二拠点居住
立ち位置			島内	島内外	真ん中
ベクトル ウェイト	島 内	情報発信	◎	○	—
		形成	◎	◎	○
	島 外	情報発信	○	◎	—
		形成	—	○	○

表3 キーパーソンの考察

ふれあい農園 K 氏は13年前に新島来た移住者である。彼は、村役場が運営するふれあい農園の職員であり、農業という自分の持ち場あり、立ち位置は島内である捉えられる。彼のベクトルとしては、島の作物を外に売り出していこうとする Nieve との連携による外向きの活動もあるが、コミュニティの視点で考えると、朝市活動からの一連の流れから農家への意識改革など内側への働きかけが強いと考える。また情報発信と同様に島内にとどまらない都市との交流への働きかけが強い。商工会 K 氏は、新島の血縁を持っているが、出身は島外であり、本土暮らしが長いため経歴は U ターン者として捉える。立ち位置は島の商工会青年部としてシナジー事業などの仕掛け人であると同時に、島外では大学教授として「学」との連携が可能である。したがって島内外の両方に位置し、そのベクトルも双方に向く。彼は音楽イベント、シナジー事業において、従来の商工会幹部を説得し、住民を巻き込んだ形での取り組みに踏み切った。また従来から活気のあった若者を中心とした WAX や同級生の横のつながりは都市との親和性が高く、彼らと組織に見られるムラ型コミュニティとの間を取り持っていたと考えられるため、引き込みの力を強く発揮していたと考えられる。この点でふれあい農園 K 氏と同様に、島内において垂直型のコミュニティを水平型へと導き、都市との親和性を高める役割を担っている。一方で、ビーチラウンジ WAX やアウトドアウエディングに関する論文執筆や島談義による島外との情報発信・交換などの連携づくりの場のコーディネーターも行っており、新島での活動とその成果を外部へ発信する役割も担っている。島談義に関しては不定期におこなわれ、その都度場所やメンバー、期待する効果が異なるため分類からは除外しているが、設定の場によって、すべての項目に当てはまることも考えられる。

最後に、民宿兼カフェである saro は夏季限定の施設であり、二拠点居住を実践している。立ち位置は、拠点を構えている島内であるとも捉えられるが、宿として島外者を受け入れる場であると同時に、カフェとして島の人も訪れる場として両者に対し

での働きかけがあり、ちょうど島の内と外の間位置すると考えられる。したがって両者がコミュニケーションをとることができる空間と捉えることができる。

【5-2】地域プラットフォームの形成

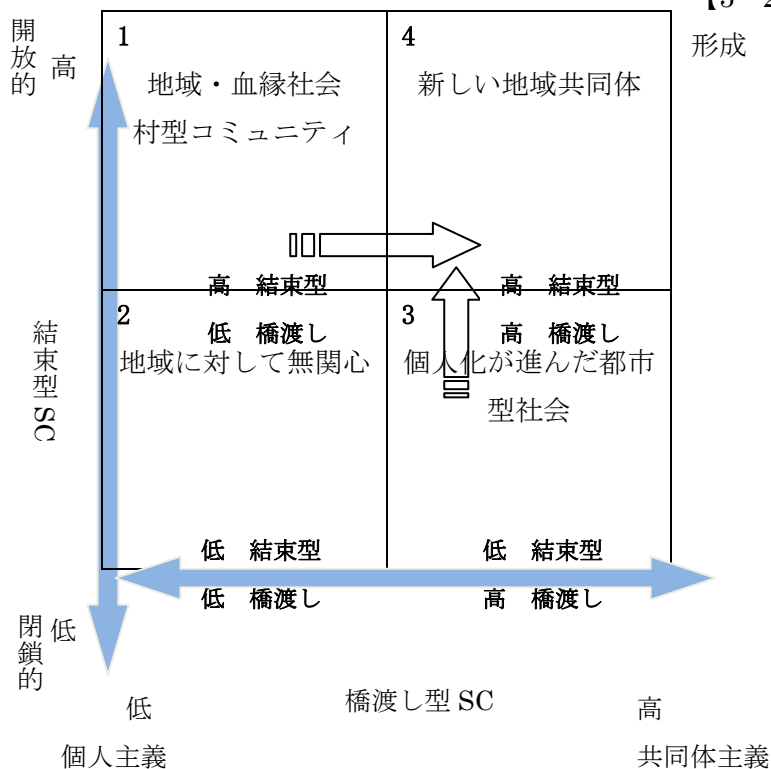


図 17 SC から見る地域プラットフォームの4つのタイプ

上の図 17 は敷田(2012)の地域プラットフォーム論をもとに結束型 SC と橋渡し型 SC のマトリックスを描くと上記のように4つに区分できる。都市化の流れから IU ターンの増加など、地方から都市への一方的な流れが変わりつつ中、今後地域の多様性は高まるであろう。そして、今後展開される方向性として4の「新しい地域共同体・コミュニティ」と言われるような、自立的かつ開放的な共同体がある。特に NPO 団体やミッションを共にした比較的關係性の強い組織などの重要性が増してきており、この領域の発展が期待されつつある。敷田は最終的に全てが4のタイプに到達するのではなく、4つのタイプが並存するだろうと述べているが、よそ者と地域の関係性を捉えた時、実際には一つの地域の中に1~4のタイプが同時に並存することも考えられる。地域における複数の社会的組織、ネットワークの中でメンバー同士がどのような関係性にあるかを同様にしてこの4つに区別することが可能であるとする。

新島の場合、離島の特性を持ち、自然とお互いが日常生活で影響を与え合うゆえに、豊かな生活や安定した生活を送るためにはある程度の協力関係が求められ、そこには地縁・血縁に基づく強い村型コミュニティが生まれる。これは結束型 SC に分類する

ことができ、規範が行き届きやすく、内部でメンバー同士が強く結びついている状態は、一致団結して課題に対応するのに適している。その一方で地縁・血縁に重点を置いた年功序列といった、村社会における典型的な垂直的に閉じた組織であるため、共同体としての一体感は強いが、同時に既得権益と結びつきやすく、排他性を伴うことがある。これはマトリックスの1のタイプに当てはまり、新島でも従来の商工会上層部などが当てはまる。

また、新島では昔からサーフィンの島として有名であり、音楽・海といった若者にとって魅力的な文化が古くから育っていた。若者を中心とする音楽イベントが自主的活動として育っており、地域活動において関わりの薄くなりがちな若者層の力を活かすことができている点に大きな特徴がある。「よそ者、若者、馬鹿者」の三拍子の中で「若者ー若さというエネルギーが大きな活力となる」と捉えられているように、新島の地域づくりの方向性においても重要な軸として位置づけられるだろう。実際に、ウエディングのコアスタッフや関連性のある地域活動に関わる主要アクター達は30～40代が目立つ。同様に新島を訪れる客層もリタイア世代ではなく、若者層に人気が出ており、WAXの活動では若者を中心に支持が得られ、特定のファンも獲得している。saroのH氏もWAXをきっかけに新島にやってきた一人であり、若者の自発的な活力を生んでいることが分かる。また新島はFacebookやtwitterなどのSNSをうまく活用しており、個人のブログも多く、広くの情報が公開されている。このような情報発信力の高さも若者が活発である新島の特徴と言えよう。シナジースキーム事業が始まり、活動間の連携が取れていく中で、商工会がHPの作成やSNS活用事業なども積極的におこなっていた背景もある。また、離島ブームに伴う外部資本が流入し、市場経済に組み込まれていった背景からも、単なる閉じた村型社会とは異なる様相を示していると考えられる。これらは4のタイプに近く、個人的な趣味・関心でつながる仲間内など、対外的に開かれて情報の伝播という面で外部性を持っており、都市型コミュニティとの親和性の高いコミュニティが存在していたと考えられる。

以上のように新島には、濃密なコミュニティを母体するつながりと、音楽やサーフカルチャーなどに関わる主に若者たちを中心とするつながりの二層的なコミュニティ構造が描くことができる。前者は年功序列の垂直結束型であり、後者は都市との親和性の高い横への広がりを見せると同時に、彼らは同級生という地縁・血縁に基づくグループもつুক্তっており、つながりも強い水平結束型といえる。このように島内にはメンバー同士のヒエラルキーのある垂直的な組織と対等な関係にある水平的な組織とを対比し、二層構造が存在している。

このSCの区別に関連して、閉じたネットワークと開いたネットワークという概念がある(稲葉2011)が、これは、ネットワークが開いている方が互酬性の規範がより貫通しやすいと論じるものであり結束型SCに通ずるものである。そして個人のネットワークの中での空隙を埋めることに意義があり、そこから生じる付加価値が社会関係

資本であると論じている。例えば、一つのグループで互いに面識のある友人を持ち、よりグループに深く組み込まれている個人がいる。一方で、いくつかのグループに属する相互に面識ない友人を持つ人もおり、彼らは異なるグループをつなぐ橋渡しのような役割を果たすことが可能である。グループに一人でも橋渡しとなる個人がいた場合、その人物を介しつながったグループのメンバーとつながる可能性が高まるのである。閉じたネットワークが集団内の人々を結びつけるとすれば、開いたネットワークは集団同士を結びつけてより大きな共同体を作り出す。そして、ネットワークが開いていれば経験や情報が重なっていることが少ないがために新しい情報を得ることが容易である。実際の人と人のつながりは以上のように、閉じた部分と開いた部分が混在していると考えられ、一つのグループの中でどの部分に自分自身を置くかによって、個人的に性格が違うネットワーク(コミュニティ)の中に身をおくことになる。つまり、社会的ネットワークにおけるその人の立ち位置によって、得られる関係性も異なってくる。新島においても同様に、村型コミュニティから都市型コミュニティへの親和性を高める過程で、島全体が開かれていったわけではなく、開いた部分をつなぎ合わせることで、よそ者と地域、地域と地域を結び付けることが可能であったと言える。このようなネットワークの橋渡しをするコーディネーターの役割を担っているのがすでに述べた中間的存在としてのキーパーソンの存在である。ウエディングに至る背景までにこの2つの特性をもつ組織の対立を述べたが、アクターそして島内におけるこの2つの間に立ち、情報発信、ネットワークの形成(橋渡し)をしているのがふれあい農園のK氏と商工会のK氏である。開かれていない部分に対して働きかけ、垂直型を水平に伸ばすようにネットワークを開いてゆき、実際の交流の場・空間となるsaroや島談義などを介して外側との親和性を高めていった。このように、新島にはよそ者と同様に都市的要素を担う存在があり、村型コミュニティの中でそれは、島の外に開かれた部分として捉えることができるだろう。彼らのようなコーディネーター的人材がアクター間の橋渡しを担う過程で、人口が少ない新島のような地域では、プラットフォームはその人とその周辺に成る場合がある。これらを接点として同時に島外からの歩み寄りもあり、地域側とよそ者間でも顔の見える関係が築かれ、考え方やミッションを共有することで一体感を醸成し、個人と個人がつながる関係性が構築されていった。外側との接触にあたっては、コーディネーターは門番のように外への結節点としてとして、外から関わる人を線引き、正しく共感で島に入るか事前に見ていると考えられる。

新島のアクターたちを商工会青年部のK氏は「クラウド的チーム」という言葉で表現していたが、一人ひとりができることを行ない、少人数だからこそ小回りも利いて臨機応変に動くことができるという特徴があった。これは村型コミュニティの声かけで得られる連携のしやすさを基盤として、個々の役割の明確化、よそ者との関わりの過程で地縁だけではない個人と個人のつながりを生み、連鎖的な活動へと展開してい

った結果であると考え。一方で、目的や価値観を共有すれば誰でも参加できるという場合は、そのコミュニティからの退出も容易であるという協調面の問題も指摘されるが、顔の見える関係を築くことができる新島の規模感がうまく補完していると考えられる。島全体として何かをするためによそ者の得意なことを生かして協力し合うといった、地域の中での意識の共有や主体性などが育まれ、地域内外が連携する際に大きく作用したと考えられる。

つまり、従来の信頼を基にした土壌(結束型 SC)を活かしつつ、同質性が高く、過剰の気遣いが求められるような村型コミュニティにとどまらず、よそ者を通じた都市・他地域との交流により、集団間の水平的なつながり(橋渡し型 SC)を生み出し、開かれた新しい地域コミュニティへの展開を見せていったと捉えることができる。これを示したのが図 17 であり、新島は、基盤となる村型コミュニティである 1 とよそ者を中心とした都市型コミュニティの 3 の歩み寄りによって、4 という新しい地域共同体として姿へと移行している段階であると言える。つまり、村型コミュニティのメリットを維持した上での都市型コミュニティとの結びつきを強化し、2つのコミュニティの特性が融合されたハイブリットな地域プラットフォームを目指している。このことは、まさに村型コミュニティと都市型コミュニティの相互補完による融合として捉えられるだろう。

以上の新島における地域活動の内容を踏まえると、新島にはもともと「顔の見える関係性(結束力の強い地域共同体)」と「若者を惹きつけるカルチャー(若者の活力)」が母体として存在し、そこに、「情報発信力」「地域の潤滑油」「新たなよそ者を呼び込む」よそ者たちが入り込むことで地域内外の交流の活発化、より広域な活動の展開へと新島という地域は変容していった。これまでのキーパーソンの考察と地域プラットフォームを空間的に表したものが以下の図 18 である。矢印は向き・色・太さで効果を区別している。矢印(赤)は「情報発信」、矢印(黄)は「ネットワークの形成」を表し、矢印の向いている方向への働きかけとなる。太さはそのウェイトを示している。

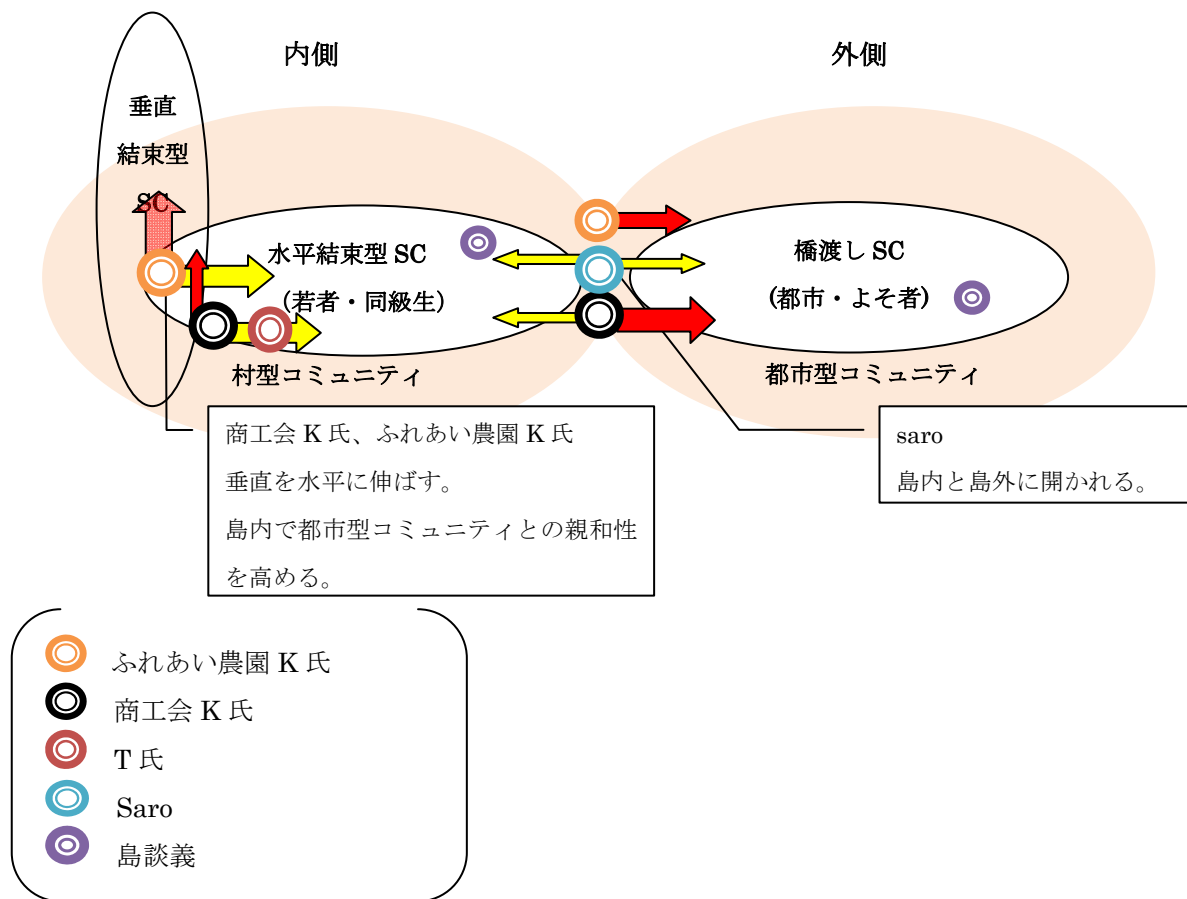


図 18 新島における地域プラットフォームの空間的把握

図 18 のように都市型コミュニティ(外側)と村型コミュニティ(内側)を結ぶひょうたん型のネットワークの中で、そのちょうど中間には sarō という場があり、ネットワークをつなぐコーディネーター役としてふれあい農園 K 氏と商工会 K 氏が島内外で機能し、島談義のような関係性を作る場も設定される。また、島内でも都市的な役割人材型の K 氏の場合、島の若者たちを中心とする結合型 SC に働きかける際に同級生であり、『それじゃみんなついてこないよ』と助言してくれる T 氏の存在が仲介している。島全体が開かれているわけではなく、開かれた部分につながる、もしくは橋渡し人材によりネットワークを開けることによって、島の内側と外側のネットワークが形成されている。また島内に存在する二層構造では、都市型人材としての性質が強い K 氏と島内の若者を中心とする水平結束型のコミュニティにアクセスする際に、ウエディングを共に創っていった T 氏の存在がある。そして現在は少数の人々との個人的

な絆を結びつつ、Facebook などの SNS を使って何人もの人々とゆるやかなつながりを結ぶことも可能になった。つながりの多い人もいれば、少ない人もいるようにネットワークの中でそれぞれが多様なつながりで密接に結ばれており、その人物が社会的ネットワークのどこに位置するかを左右する。しかしこのようなネットワークやキーパーソンの立ち位置は決して決して固定的なものではなく、活動の中で絶えず変化する動的なものであり、変動していることは忘れてはいけないだろう。

【5-3】活動を担うアクター達のモチベーション

持続的な活動の発展を目指すためには活動を担うアクターたちの活動への姿勢も重要となってくる。なぜなら、地域プラットフォームはアクター無しに生じることはなく、そして彼らが活動を進めるモチベーションがなければ地域づくりは実現できないからである。また同様に、アクターたちがプラットフォーム無しにうまく機能することもできない。インタビューやフィールド調査を通じて、住民たちの義務感や責任感だけでなく、生き生きと活動をしている姿が印象に残った。実際に地域づくりの担い手として参加する人々に対して、活動に対するモチベーションは何かという質問をしたところ、彼らのほぼ全員が「楽しいから」と答えている。その「楽しさ」を中心にして地域活動に参加している人が多く、自発的参加へのプロセスには役割意識が大きく働いていると考えられる。閉鎖的であるという離島地域の特性は、逆を言えば誰もが顔見知りであり、濃密な人の繋がりがあるということである。地縁・血縁・社縁でつながる関係性を「しがらみ」と捉えるか、「信頼」「セーフティーネット」として捉えるかが地域活動参加に対するモチベーションを異にする点であると考えられるが、これを後者と捉えて、ポジティブな動きに転換しているのが新島の特徴であると言える。以下は数年前に島に戻り、地域活動に参加している方の言葉である。

高校から上京して部活が忙しかったり、大学中退してバイトに明け暮れて、ようやく就職して忙しくなってからも、ずっと島は重荷みたいに背負うようなものでした。

親の介護が必要になって、仕事辞めて帰ることになった時はもちろん、帰って2年半くらい経った今でも、未だに苦手で嫌悪感のある島の印象が変わってないところもあります。

そういう自分から突き抜けたっていう個人的な気分と、少しでもそういうイメージを自分から覆したいっていう無茶な？思惑が一連の仲間や活動に惹きつけられるのかもしれませんが。でも自分の仕事より楽しいし、熱くてかっこいい大人が集まっているので、その輪の中でいろいろ経験できるのは、やりがいがあるなと思ってささやかながらお手伝いしてます。

島の凝縮度の高い行動様式や関係のあり方を重荷のように感じる側面がありなが

らも、島の活動に「やりがい」を感じており、そこには周りの仲間たちの存在が見て取れる。「つらいものも何も目指すものが一緒だからやりがいがある。」と話してくれたように、新島には共有・信頼を軸とした仲間意識や結束力の強いコミュニティが母体としてあった。新島では地縁・血縁に基づく強制的な単純労働としての地域活動ではなく、個人の趣味や特技を活かして参加する役割モデルが形成されてきた。自らの特技を活かす場所、出番があり、信頼を担保としているだけではなく本人たちが活動することで得られる自信ややりがいの存在が、地域づくりに参加する満足感やモチベーションにつながっていると考えられる。自己実現のための労働が求められていると広井(2009)は指摘しているように、仕事だけではない活動で自己実現を目指す生き方が共感を得ている。NPO や社会起業などの²⁰ミッション(使命)志向型のコミュニティの領域が発展する中で、新島では様々なレベルの活動が連携補完し合いながら具体的なミッションを持った活動への展開が期待されている。伝統的な地縁コミュニティを活かしつつ個人をベースとする自発的かつ開かれた共同体が築かれつつあるのである。アクターたちに共通する「楽しい」という思いが活動への疲弊を防ぐことができる要因の一つであり、継続的な活動への参加意欲を掻き立てていると考える。こうした都市型コミュニティへの歩み寄りがあった一方で、よそ者たちもムラ型社会を基盤とする島に魅力を感じていた。会社や核家族を基盤として、それを超えるつながりが希薄になり独立した個人の孤立度が高くなっていると考えられる都市において、実際の社会的つながりや自らの立ち位置がありながらも、孤独感や生きづらさといったどこかつながりがないという心理的な感覚がある。都市型コミュニティというものは、開放性という点においては長所を持っているが、その結びつきを支えているのは規範的・理念的なルールや原理であり、それ自体において“情緒的な基盤”を持っていない。しかし、人はどこかに心の拠り所を求めてしまうような感情的な部分を持っており、何らかの形で「村型コミュニティ」的なつながり、つまり共同体的な一体意識も必要としていると考える。島には都会にはない美しい自然、自然と共にある暮らし、そしてそこに住む人々の親密なつながりがある。都市にはない「共同体としての一体感」を村社会である島に求めたのである。交流を通して島を大切に思う心を共にしたよそ者は「共感」を軸に島に飛び込み、仲間となったのである。よそ者の異質性を前提としない共感を軸にマインドを同じくした人々が、島全体として何かをするために得意なことを生かして協力し合うといった、地域の中での意識の共有や主体性などが育まれ、よそ者としての役割を發揮した。初めから彼らは情緒的な感情を軸とした仲間という意識があったのである。よそ者が新島に入り込んでいく背景には、島側が一方的な受容側であるような外部依存の形ではなく、島側とよそ者との協働による自発的活動が見られた。どちらの立場からも歩み寄りがあり、それはお互いに必要な要素を補い合うことである。都市は島に情緒的そして感情的な共同体的な一体感を求め、

²⁰ 「テーマ型」ないし「時間コミュニティ」とも呼ばれる。

それに対し島は役割型のより開かれた共同体を求めたのである。お互いに心を通わせた仲間を得ることができ、ここに協働の姿を見ることができた。そしてこの都市と村が相補的關係性を築き、一体となった象徴かつ具体的な活動としてアウトドアウェディングがあるのである。敷田(2005)の、よそ者を「資源」と捉え、地域側がそれを活用するという視点は自立した地域が前提となっているが、新島の場合そこまで至るまでの従来の地域活動意識が高かったわけではなかった。この点で初めからよそ者の異質性に期待して受け入れたわけでもないし、よそ者を活かそうと思って受け入れたのでもないことが分かり、だからこそ共感を軸に入り込めたと考えられる。地域の個性と特性を理解し共感できるかという内面の部分を前提にしたよそ者との二人三脚である。これは、図 17 に示した SC マトリックスの 4 のタイプに当てはまる新しい共同体として、都市と村が“共に創り上げる”「共創のコミュニティ」といえる。このように「村型コミュニティ」と「都市型コミュニティ」という二つのつながりの原理は相互に補完的なものであり、それに伴うかたちで、結束型 SC、橋渡し型 SC に関しても同様のことが言える。今後、地域コミュニティにおける多様性はますます高まるだろうし、それを認め合える信頼関係のもとにコミュニティを形成するには、地縁組織が従来から担っている役割や、地縁における結束型 SC が必要である。しかし、流動性の高まりなどによって地域コミュニティはつながりの希薄化やつながり自体の喪失という問題を抱えているし、地縁組織自体が疲弊を感じているところも少なくない。そこで、特定の役割を果たす個人の存在や、地縁に捉われない、橋渡し型 SC の活用を考えることは重要であろう。都市化による人の流動性を考慮すると、個人と個人が信頼で結ばれるような関係性を築いていくことが現在の社会には求められていると考えられる。そしてやはり、橋渡し型 SC がコミュニティの発展には重要であっても、地域の課題に対しては、そこに住む人の取り組みでなければ最終的には根本的解決にはつながらないと考えられる。結果として両者のバランスが重要と考えられ、これらの多様な SC は人々が共に活動し、経験を共にすることで形成され、発展し、信頼と規範、一体感を醸成する。そして交流を通じて個人の経験が拡大されることで、一人の力を超えた新たな価値やアイデアが生まれる。まさにクラウドソーシングというような多様なアクターたちが協力し合うことにより問題に解決策を提案することが可能となる。人と人のつながりはそれ自体が成長し、変化することが明らかであり、その都度生まれる新たな現象が地域活性につながっていくのではないだろうか。現在は少数の人々との個人的な絆を結びつつ、人 SNS の普及により何人もの人々とゆるやかなにつながることができるようになった。交流は今後ますます容易になっていくが、お互いが歩み寄るためには、ゴールに向かって一緒に創りあげるための島に対する共通した思いを持っていることである。そして、そうして行動できるネットワーク自体が貴重な共有資源であり、またそのネットワークを形成する一人ひとりの存在の重要性がうかがえる。SC を住民間のネットワークとして考えると、地域

の起爆剤となるコーディネーター人材の存在も重要であるが、実際に実践に移すことのできるプレイヤー同士の結束型ネットワークが出来上がっていた点が新島では大きいと考える。

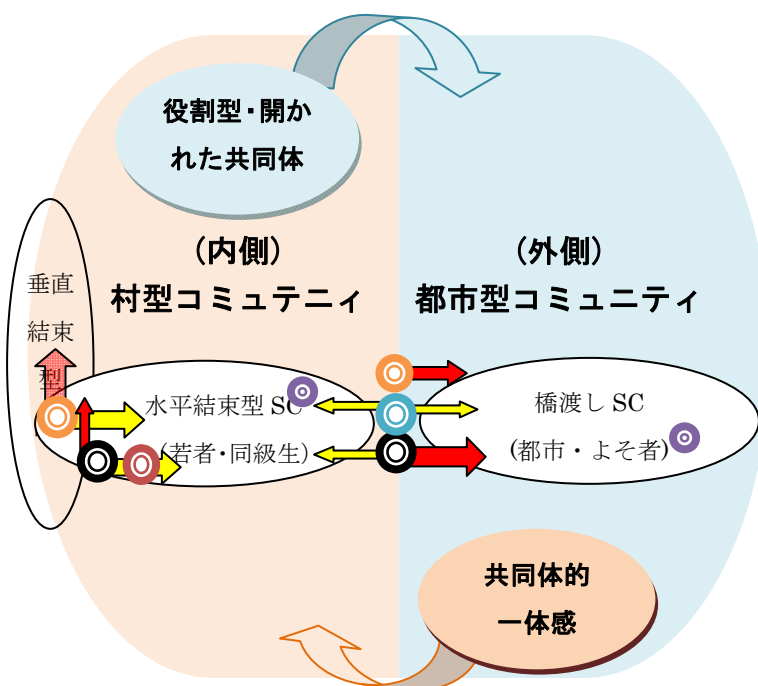


図 19 新島における村型コミュニティと都市型コミュニティの相互補完関係

【5-4】おわりに

論文執筆にあたり、筆者は新島では「よそ者が島の担い手となっているのではないか」という捉え方をしていた。しかし、調査を通じて分かった島内外の関係は、どちらにも主体性があるというよりも、島内外に関わらず、アクターそれぞれが主体性を持って地域という活動の場に参加するという協働の関係であった。RESTARTの時代であると島の人が言ったように、ここ数年の新島の動きは個人と個人がつながり新たなアクターが増え、新しい活動が生まれるという好循環を生み出しながら、より開かれたコミュニティへと段階を追って進んでいくものであった。そこには新島の魅力を理解し、誇りを持つ島の人と、新島出身ではないけれども同じ想いを共有した外側の人々がいた。しかし、人口の減少と少子高齢化が進むなか、長期的な視点で考えれば、雇用を創出し、人口の流出に歯止めをかけながら流入を促進していく取り組みは必要である。新島には小学校・中学校・高校がそれぞれ一つずつあるが、大学がないために若者たちのほとんどは高校の卒業と同時に島を出ることとなる。「島を出るのは子供たちの自由。帰ってきたいと思った時に帰ってこれるよう活動している」と話してくれた人もいる。出て行く若年層とは反対に、近年は田舎暮らしを求める人々が増え、

UターンIターン促進に力を入れる自治体も増えてきている。若者たちに代わり、彼らが担い手となるように、これらの交流の先にはやはり定住という選択肢があるのだろうか。この疑問に対して商工会青年部の K 氏が以下のように答えてくれた。

「交流の直接的先に定住はない。まず、仕事・業をつくることができないと不可能。交流は、その仕事・業を支える人材・経済的資源・ソーシャル・キャピタル・島の戦略そのものの母体になると考えている。」

アウトドアウェディングやビーチラウンジ WAX など、メンバーのほとんどがボランティアで成り立っている活動であり、WAX に関して言えば、全員が自らの本業とは別におこなっている活動である。基本的に、「楽しいから」「新郎・新婦のため、島が盛り上げるから」といった想いを軸として活動しているスタッフであるが、コアスタッフとして関わるほど、負担や時間の拘束が増え、本業との兼ね合いが難しくなり、想いだけで続けるには厳しくなっている。いつまでこのような形で続くのか、持続可能性の点で懸念が出つつあり、現在、NPO 法人などに組織化するという話も出てきている最中である。このように交流をきっかけに人々を生かし、ネットワークを広げ、連携を深めるといった内発的な地域の土台作りをしている現状が、今の新島の姿であると筆者は考える。異なる人々が行き来する中で新たなことが生み出されていくことが交流であり、その地域に暮らす「人」もその地域の魅力の一つとして捉え、そこで生まれる関係性自体が将来の地域資源になると考える。交流を原動力とした島づくりは経済的自立よりも先に地域の精神的自立を目指すものであり、地域の自立性の確立はよそ者や公共事業を逆に活用していこうとする仕組みにつながる。そしてこれから離島の産業を構造から変えていく戦略となる。以上のように、新島では住民参加から主体としての担い手へ、現在はこれらの動きを統合して地域社会運営に向かう組織化の動きが見えてきている。今後の地域づくりにおける運営のしくみとして、地域内にとどまらない地域外アクターへの視点も重要になると考え、地域の将来を考えたときの単なる顧客ではないパートナーの創造として交流が果たす可能性は大きいと考える。

終章

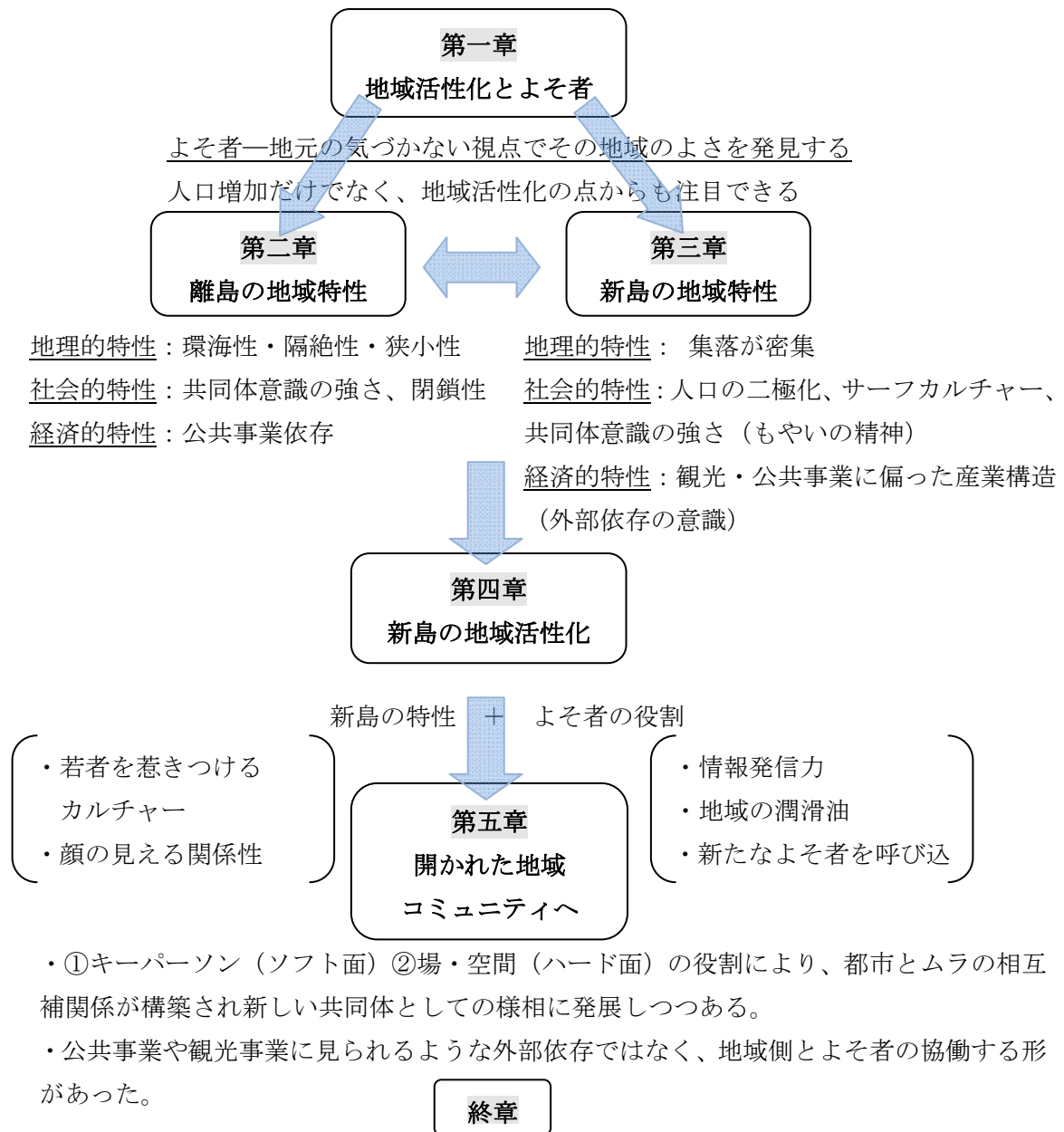
【1】論文まとめ・フロー図

序章

問題意識 若者の島外流出、少子高齢化などの問題を抱える新島において、「よそ者」が島の担い手となるのではないか。

研究目的 新島における地域づくり活動の流れを把握し、その中で内側(島)と外側(よそ者)の関係性について考察する。

仮説 内側と外側との協働による地域活性には「外と内を繋ぐ中間システムの存在」があったのではないか。



本稿は序章、第一章から第五章、終章で構成される。序章では、研究の背景と目的、及び調査方法について提示した。公共事業への依存、行財政の負担に加え、人口流出、高齢化など、これまでの外発的発展だけでは離島地域の問題は解決されず、生活の維持が難しくなってきた中で、地域住民による内発的発展を目指す動きが東京都新島村では起きている。特に新島では島外からやってきたいわゆる「よそ者」の存在が際立って見られた。そこで、「新島において、この『よそ者』が島の担い手となるのでは

ないか。」という仮説のもと、ここ数年の新島における地域づくり活動の流れを把握し、新島における内と外の関係性を明らかにし考察する。そして内(島側)と外(よそ者)を繋ぐ地域社会運営のための仕組みを明らかにすることを本稿の目的と設定した。

第一章では、地域活性化とよそ者の関係性について、先行研究を参考に整理した。地域主体の地域づくりが叫ばれているが、多くの地域が抱える悩みは、地域づくりを進めようにも地域に十分な人材がないということである。よそ者は「地元の気づかない視点でその地域のよさを発見する」とあるように、地域何らかの影響を与え、変化を促すなどの効果が期待され、人口増加という側面だけでなく、地域活性化の点からも注目されつつある。この考え方から地域が外からの支援を受け入れるという形で地域運営を補完する機能をよそ者に期待できると考えた。本稿ではよそ者を、「観光客を除き、地域の取り組みに自発的に参加する地域外出身者」と定義した。これは、一時的な滞在の観光客は地域の仕組みや利害関係に与える影響力が少ないと考えたからである。地域とよそ者の関係性について考えるとき、地域が一方向的に受容するというこれまでの外部的開発ではなく、地域側がよそ者を「資源」と捉え、活用するという地域側の視点が重要であると考えた。この「地域や組織がどのようによそ者と協働できるか」という視点を新島における内外の関係性を考察する上での重要な視座として取り挙げた。

第二章では、離島地域の特性について距離・密度・閉鎖性・逃げられない状況などのキーワードをもとに整理した。また、離島振興法という制度的な面から離島の定義や概要を踏まえ、離島がどのように捉えられてきたのかを「離島振興計画」とその背景にある「全国総合開発計画」を照らし合わせ離島のあゆみを整理した。離島は環海性・隔絶性という地理的条件のもと、物資や人の輸送手段が天候などの自然条件に大きく左右されるため、旅客・貨物運賃が割高で、島の生活の安定と産業の発展に与える影響が大きい。また、離島の狭小性も含めた特性は「逃げられない」という意識や、豊富な自然の中で朝日から夕日までの流れを共有するといったことから共同体としての一体意識が強いという社会的特性に結びついていると考えられる。環海性・隔絶性は生活を維持していく上での制約となり、これらの後進性を「本土なみ」に引き上げることを目的に離島振興法が制定された。当初、離島の基礎条件の改善と産業基盤の整備が中心の、いわゆる公共事業を中心としたハード面から後進性の除去を目指したが、国や県からの公共事業による高い補助率を背景に、自らの努力による振興に期待しない外部への依存率の高い地域構造に結びついていった。次第にハード面だけでなくソフト面を重視する動きに移行し、資源を生かしたその地域の独自性の創出が求められ、自立的発展を目指す方向性へと転換している。このように国や自治体が行う公共事業による地域活性化が図られてきた流れから脱却し、島自らの力で発展する地域運営の仕組みが求められている背景がある。

第二章を踏まえて、第三章では新島の地域特性について整理した。新島は流人島と

いう歴史があり、昔から外からきた者(=よそ者)である流人は「何か新しいものをもたらしてくれる存在」として捉えられてきた。また、サーフィンの島としても有名であり、海や音楽といった若者を魅了する資源をもち、広く若者を受け入れてきた。このような若者の活力が母体としてあり、後の地域活動へ展開することとなる。産業については、離島ブームを背景とする観光業の台頭により、第3次産業に偏る産業構造を示している。最盛期に比べ観光客は半減し、低迷状態を続けているが、待っていれば客が来るという離島ブームを経験した事業者たちの危機意識は薄い。同様に公共の建設事業に依存する度合いも高く、島の雇用の場としていまだ重要な位置を占めており、産業・経済面で外部依存の傾向にある。今後、観光業や公共事業がこれまでと同じ規模では続かないことが見え始めている中、人口二極化という問題も抱え、他の離島と同様に島自らの力で地域戦略が求められていた。

そこで、第四章以降は、よそ者と島側が協働して実施したアウトドアウエディング事業を例に、地域の自立を目指した新島の動きを整理し、そこに至るアクター間の関連性を見た。もともと新島には若者を中心とした音楽やサーフカルチャーの自発的活動があり、音楽イベントと商工会のシナジースキーム事業のプロジェクト型事業をきっかけに役割意識の形成と事務的な機能の重要性が浸透した。ここでは従来の外部依存の意識に対して切り開いていくためにも「住民力」を伴った成果を出す必要があった。シナジー事業のコーディネーターを地域住民から雇用することで、コミュニティの自発的・ボトムアップ的活性化の呼び水の役割を果たすとともに、島内外のつなぎ役的人材に成長することが期待されたが、実際には、島内には従来の年功序列性の強い組織と、次第に主体性が生まれてきた住民の間には意識の大きなギャップが存在しており、このギャップに対応していく必要があった。組織になった時のムラの閉じたネットワークをいかに開くことができるかという課題に対して、働きかける少数のキーパーソンが存在することがうかがえる。これらの事業をきっかけとして都市型的な役割人材の重要性に気づくとともに、そのような多様な人材が島にいることに自分たち自身も気づき始め、都市型コミュニティへの歩み寄りが見られた。

その後、地域住民からの要請によりウエディング事業が発足し、島内の雇用形態によらず個人の特技を活かせる役割や出番が確保されることで地域活動参加の場としても機能したと考えられ、様々な方面からの人的活力が得られた。さらに、この頃から saro や Nieve といった外部アクターが加わるなど島の魅力を感じた都市側からの村型コミュニティへの歩みも見られた。新島の活動は島内外の人的活力を得、特に島内外の若者が交流して作り上げる関係性が活発になっている現状であり、外部への連携も展開されていった。ウエディングが、地域活動参加へのきっかけの場にもなり、地域活動への参加度合が高まることで、複数の活動主体が連動し、相互の情報交換・共有などを通じて、徐々に個別の活動を越えた連携体制が現れてきた。

このような特徴を持つ新島において3つのよそ者の役割が観察された。外からやってきたよそ者は外部のネットワークを持つと同時に、地域の人間関係に縛られない立場からの発言力を持ち、内側と外側に対する「情報発信力」を持つ。内側に対する発信が地域に新たな視点をもたらし、さらに地域の円滑なコミュニケーションを生む「地域の潤滑油」と機能する。さらによそ者は高い情報発信力から「新たなよそ者を呼び込む」力も持っている。地域に新たな仲間を呼び寄せる地域外のネットワークを持ち、これらの人的活力がまた新たな活動に展開するという可能性を持っている。そして、役割とともに彼らが地域の中でどこまで活動を担うことができるかは、よそ者の種類と活動内容によって異なる。同様によそ者がどのようにして地域に参加するかは、よそ者に対してどのように地域が開かれているかによって異なってくる。地域の開き方も同様にテーマ型や役割型によって異なってくると考えられるが、いずれにしても前提として考えられることは、興味・共感をベースとした意思疎通が図れるかという点であり、互いに共通のマインドを持ち得たとき、よそ者は地域の中で認められ信頼され、よそ者としての役割を担ってくる。

ではよそ者たちと島側が協働するための両者間のコミュニケーションはどのように行われたのか。第5章では、彼らの相互のコミュニケーションを円滑にさせる中間的存在として①キーパーソン②交流する場・空間の存在を示すことで、新島の島内外アクターたちの関係について全体像を明らかにした。そして新島で展開されてきた活動は、閉鎖的であった新島の地域がよそ者との関わりの中でより開放的な地域プラットフォームを形成している過程であると捉え、地域プラットフォームという大きな枠で捉えなおし、その空間的把握を行った。ムラ型コミュニティから都市型コミュニティへの親和性を高める過程で、島全体が開かれていったわけではなく、開いた部分をつなぎ合わせることで、よそ者と地域、地域と地域を結び付けることが可能であったと言える。このようなネットワークの橋渡しをするコーディネーターの役割を担っているキーパーソンの存在があり、アクターそして島内におけるこの2つの間に立ち、情報発信、橋渡し(引き込み)をしているのがふれあい農園のK氏と商工会のK氏である。開かれていない部分に対して働きかけ、垂直型を水平に伸ばすようにネットワークを開いてゆき、そして実際の交流の場・空間となるsaroや島談義などを介して外側との親和性を高めていった。このように地域にいながらよそ者と同じような役割型の都市的要素が新島には存在しており、村型コミュニティの中でそれは、島の外に開かれた部分として捉えることができるだろう。これらを接点として同時に島外からの歩み寄りもあり、地域側とよそ者間でも顔の見える関係が築かれ、考え方やミッションを共有することで一体感を醸成し、個人と個人がつながる関係性が構築されていった。新島は、従来の信頼を基にしたムラ型コミュニティ(結束型SC)を活かしつつ、よそ者を中心とした都市型コミュニティ(橋渡し型SC)との交流により、新しい地域共同体として姿へと移行している段階であると言える。つまり、ムラ型コミュニティのメリッ

トを維持した上での都市型コミュニティとの結びつきを強化し、2つのコミュニティの特性が融合されたハイブリットな地域プラットフォームを目指している。このことは、まさに農村型コミュニティと都市型コミュニティの相互補完による融合として捉えることができる。都市は島に情緒的そして感情的な共同体的な一体感を求め、それに対し島は役割型のより開かれた共同体を求めたのである。お互いに心を通わせた仲間を得ることができ、ここに協働の姿を見ることができた。敷田(2005)の、よそ者を「資源」と捉え、地域側がそれを活用するという視点は自立した地域が前提となっているが、新島の場合そこまでに至るまでの従来の地域活動意識が高かったわけではなく、地域の個性と特性を理解し共感できるかという内面の部分を前提にした共感を軸とするよそ者との二人三脚である。これは新しい共同体として、都市とムラが共に創り上げる「共創のコミュニティ」といえる。よそ者の異質性を前提としない共感を軸としてマインドを同じくした人々がやってき島全体として何かをするためによそ者の得意なことを生かして協力し合うといった、地域の中での意識の共有や主体性などが育まれ、よそ者としての役割を發揮した。そしてこの都市とムラが相補的關係性を築き、一体となった象徴かつ具体的な活動としてアウトドアウエディングがあるのである。新島には公共事業や観光事業に見られるような外部への依存を単純によそ者への期待に転換するのではなく、地域側とよそ者の協働する形があった。そしてこのように交流をきっかけに人々を生かし、ネットワークと連携を深める地域の土台作りをしている現状が、今の新島の姿であると筆者は考える。交流を原動力とした島づくりは経済的自立よりも先に地域の精神的自立であり、人材・経済的資源・ソーシャル・キャピタルなど、島の戦略そのものの母体になるプラットフォームづくりであった。

【2】論文の意義

近年、自治体だけによる地域活性ではないNPOや社会企業家など、多様なアクターが関わる地域づくりが進められてきている。従来の新しいコミュニティや新しい共同体に向けた取り組みの多くは「地域内」アクターを対象とするものが多い中、本稿では、地域住民以外の人であるいわゆる「よそ者」に着目した。よそ者の役割にも言及しつつ、外側の視点だけでなく、「地域内外」合わせたアクター同士の関係性から、外部アクターたちの地域の担い手としての可能性を示した。また、地域づくりに対する協働のあり方を言及するのではなく、そこに至るプロセスを考察することで、ソーシャル・キャピタルの考え方に照らし合わせて、交流のしくみとコミュニティの発展について言及することができた。このことは離島に限らず、地域におけるプラットフォームづくりの示唆を含んでいると考え、今後ますます進む多様なアクターたちによる地域づくりの実現に少しでも寄与できれば幸いである。

【3】謝辞

本稿を卒業論文として形にすることができたのは、様々なご指導を頂いた浦野正樹教授、新島に関する資料提供やご指導を頂いた木村諭史様、小林恭介様、一ヶ月のフィールド調査にあたりインタビューを初めとする本当に多くの面で協力して下さった新島の皆様のおかげです。ここではすべての方の名前を挙げるのは難しいですが、一人ひとりの顔が浮かぶほど本当に新島の皆様には多くの励ましとご協力を頂き、執筆することができました。たった一カ月ではありましたが、自分の住む地域を愛し、精一杯生きる島の人たちの姿に刺激を受けたことはとても重要な自分の財産になると思います。貴重な時間を割いて調査に協力して下さって本当にありがとうございました。そして最後に、多くの指摘をもらい、一緒に論文を乗り越えてきたゼミの同期、4年生に付き合ってくれた後輩の皆に感謝します。

協力して頂いた皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げたく、謝辞にかえさせて頂きます。

(引用・参考文献)

- 佐藤快信(2007)『離島振興からみた離島地域の自立』
- 越田明子(2003)『「離島の離島」 高齢者の生活ネットワークに関する一考察 鹿児島県瀬戸内町を事例として』
- 水谷史男(2001)『離島社会と高齢者生活の現状』同法学会
- 奥野一生(2003)『日本の離島と高速船』
- 敷田麻美(2005)『よそ者と協働する地域づくりの可能性に関する研究』
- 敷田麻美(2006)『地元学と“よそ者効果”』
- 敷田麻美(2009)『よそ者と地域づくりにおけるその役割にかんする研究』
- 小林恭介(2010)『新島産のアメリカ芋を焼酎原料や加工品に』季刊しま No.222
- 木村諭史(2012)『コミュニティウエディングの社会的意義と実施におけるガイドラインの考察』
- 小林勝法・西田亮介・松本秀夫(2012)『新島におけるサーフィンによる観光誘致の経緯』
- 敷田麻美・森重昌之・中村壮一郎(2012)『中間システム役割を持つ地域プラットフォームの必要性とその構造分析』
- 敷田麻美 森重昌之(2007)『持続可能な地域の実現に向けた観光・交流活動の戦略的活用に関する仮説の提案—北海道黒松内町の地域振興プロセスを事例に—』
- 金山智子 (2008)『離島のコミュニティ形成とコミュニケーションの発達—隠岐那賀中ノ島編—』
- 新島村(1996)『新島村史 通史編』
- 岩崎信彦・矢沢澄子監修(2006)『地域社会学講座 3 地域社会の政策とガバナンス』東信堂
- 広井良典(2009)『コミュニティを問い直す—つながり・都市・日本社会の未来』ちくま新書

山内道雄(2007)『離島発 生き残るための10の戦略』生活人新書
黒川紀章(2006)『都市革命—公有から共有へ』中央公論新社
玄田有史『希望のつくり方』岩波新書
稲葉陽二(2011)『ソーシャル・キャピタル入門』中公新書
日本離島センター『離島統計年報』
日本離島センター『離島振興法ガイド』
全国離島振興協議会(2012)『島々が支える豊饒の海洋大国・日本』
新島村商工会『平成22年度 もやいの絆事業報告書』
新島村商工会『2009 宿泊事業者アンケートを基にした、来島者分析』
『新島村総合計画 後期基本計画平成23年3月』
『平成23年 データにいじま』
朝日新聞朝刊 2002年8月31日 31ページ 東京
朝日新聞朝刊 1971年8月2日 24ページ 東京

(参考 URL)

新島村役場 HP <<http://www.niijima.com/>> 2012/07/19
ふれあい農園 HP <<http://www.niijima.com/farm/>> 2012/11/25
離島経済新聞 2010.11.20『島と暮らしと農業と新島ふれあい農園』
<<http://ritokey.com/2010/11/post-16.html>> 2012/11/25
グリーンズ HP <greenz.jp> 2012/11/25
小笠原村 HP <<http://www.vill.ogasawara.tokyo.jp/>> 2012/12/12
愛知県瀬戸市 HP <http://www.city.seto.aichi.jp> 2012/11/25
WAX2012 HP <<http://www.wax2005.com/>> 2012/12/16
世田谷ものづくり学校 HP <<http://setagaya-school.net/>> 2012/12/16